

安曇野市の埋蔵文化財第16集

ほうろく屋敷遺跡 5

個人住宅建設に伴う第5次発掘調査報告書

2019. 3

安曇野市教育委員会



安曇野市の埋蔵文化財第16集

ほうろく屋敷遺跡 5

個人住宅建設に伴う第5次発掘調査報告書

2019. 3

安曇野市教育委員会



表紙写真 SK 9 出土石鏃
裏表紙写真 発掘調査区遠景（北から）



1 調査地遠景（北から）（平成28年（2016）8月9日）右中央の白塗りが調査地



2 SK 9 出土石器

序

埋蔵文化財は、安曇野市の歴史を理解するためにかけがえのない市民共有の財産です。安曇野市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査等を通じて、地域の歴史資料の蓄積及び調査結果の公開普及に努めています。

ほうろく屋敷遺跡で発掘調査が実施されたのは、農業基盤整備事業に際して昭和63年（1988）7月から平成元年（1989）12月にかけてが最初です。約13,000㎡の調査の結果、縄文時代前期から後期の集落跡及び墓域、弥生時代中期初頭の再葬墓16基、平安時代の集落跡が見つかりました。犀川が蛇行しながら北に流れるこの場所が、歴史的に長期間にわたって人々に利用されてきたことが明らかとなったわけです。

その後、ほうろく屋敷遺跡では4次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代中期を中心とした集落跡の様子が少しずつわかってきました。本書掲載の第5次調査は、これまでの調査地の縁辺に位置する場所で実施しました。ほうろく屋敷遺跡の範囲を確認するためにも、重要な場所です。この結果、縄文時代から弥生時代にかけて作られた土坑と呼ばれる遺構が複数見つかり、この場所が当該期における集落の周縁部であることを確認できるなど大きな成果をあげることができました。

末筆となりますが、本書をまとめるにあたり、発掘調査を快諾してくださった土地所有者をはじめ、多くの皆様、諸機関にご協力とご指導を賜りました。この場をかりて、厚く御礼申し上げます。

本書掲載の調査成果が多くの市民に活用され、広く安曇野の歴史・文化解明に役立つことを祈念し序とさせていただきます。

平成31年（2019）3月

安曇野市教育委員会
教育長 橋渡 勝也

例 言

- 1 本書は、長野県安曇野市に所在する、ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査の報告書である。
- 2 本書掲載の調査は、安曇野市教育委員会が実施し、安曇野市が費用負担した。
- 3 本書の編集は、安曇野市教育委員会教育部文化課が行った。執筆は土屋和章、横山幸子が担当し、山下泰永が統括した。執筆分担は、以下のとおりである。
横山幸子：第2章1 土屋和章：前記以外
- 4 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括して掲載した。
- 5 本書掲載の調査に関する出土遺物及び事務書類、記録類は、安曇野市教育委員会が保管している。
- 6 調査全般にわたり以下の方々から、ご指導・ご協力をいただきました。(敬称略・五十音順)
島田哲男、白鳥章、百瀬新治、山田真一

凡 例

- 1 発掘調査及び整理作業に際し、遺跡略号として遺跡名のアルファベットと調査年度（西暦2016年）の組み合わせである次の表記を、遺物注記等に使用した。
ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査：HUR16
- 2 調査及び本書での遺構名は、次の略号を使用している。
SK：土坑 P：ピット
- 3 遺構・遺物の法量の表示で、残存箇所のみを計測した場合は（ ）で示した。
- 4 本書実測図で、遺物は次のように表現した。また、縮尺は各図に示した。
縄文土器、土師器：断面無地 石器欠損部：剥離面内空白 石器摩耗部：グレー
- 5 縄文土器の記載では、器形について「形土器」の表記を省略した。
例 深鉢形土器：深鉢 浅鉢形土器：浅鉢
- 6 石器石材等の記載では、慣例に従い「黒曜岩」を「黒曜石」と表記した。
- 7 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 8 本書では、平成17年（2005）10月1日の町村合併より前の旧郡名・旧町村名について「旧」を省略し、「東筑摩郡」、「明科町」のように表記した。
- 9 本書掲載の地形図は特段の記載のない場合、安曇野市都市計画基本図（1/2,500）を基図とし、調製したものである。
- 10 文献引用等に際し、各機関の名称を以下のように省略した。
埋蔵文化財センター：埋文セ 教育委員会：教委 編集委員会：編纂委

目 次

序

例言・凡例

目次・挿図目次・挿表目次・写真目次

第1章 調査の契機と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 調査の方法	10
第4章 層序	14
第5章 遺構	15
第6章 遺物	21
第7章 調査の総括	44
写真図版	47
引用・参考文献	55
調査報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第14図	石器の計測部位	25
第2図	試掘位置図	3	第15図	出土土器1	29
第3図	ほうろく屋敷遺跡付近の遺跡	8	第16図	出土土器2	30
第4図	調査区配置図	9	第17図	出土土器3	31
第5図	グリッド配置図	11	第18図	出土土器4・土製品	32
第6図	調査区全体図	12	第19図	出土石器1	33
第7図	遺構精査後トレンチ配置図	13	第20図	出土石器2	34
第8図	基本土層	14	第21図	出土石器3	35
第9図	SK1・SK2	18	第22図	出土石器4	36
第10図	SK3・SK4・SK8・SK10	18	第23図	出土石器5	37
第11図	SK5・SK6・SK7	19	第24図	層位対照図	44
第12図	SK9	19	第25図	敷石10号住	45
第13図	集石1	20	第26図	時期別遺構図	46

挿表目次

第1表	事務手続き経過	2	第7表	敲石・凹石・磨石の分類	28
第2表	ほうろく屋敷遺跡発掘調査記録	8	第8表	土器観察表	38
第3表	ほうろく屋敷遺跡付近の遺跡	8	第9表	石鏃観察表	42
第4表	石鏃の分類	26	第10表	石錐・刃器観察表	42
第5表	石錐の分類	26	第11表	打製石斧観察表	42
第6表	打製石斧の分類	27	第12表	敲石・凹石・磨石等観察表	43

写真目次

1	調査地遠景（北から）	47	9	集石1（北から）	48
2	完掘状況（南から）	47	10	調査終了状況（南から）	48
3	調査前（南西から）	48	11	出土土器1	49
4	SK1・2完掘（北から）	48	12	出土土器2	50
5	SK3調査状況（北から）	48	13	出土土器3・土製品	51
6	SK5完掘（南から）	48	14	出土石器1	52
7	SK9調査状況（東から）	48	15	出土石器2	53
8	SK9セクション（西から）	48	16	出土石器3	54

第1章 調査の契機と経過

1 調査の概要

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査

所在地 長野県安曇野市明科南陸郷3192番

調査面積 100㎡

発掘作業 平成28年(2016)3月22日(火)～平成28年(2016)4月18日(月)

整理作業 平成28年(2016)4月19日(火)～平成31年(2019)3月29日(金)

2 事業計画の概要

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査の調査原因となった事業は、個人による住宅建設工事である。工事内容は、既存住宅の取り壊し及び同位置での住宅新築で、新築建物は、木造・平屋建て、建築面積99.37㎡の設計である。施工地は周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたため、保護協議とともに安曇野市教育委員会が試掘を実施し埋蔵文化財の存在を確認した。



第1図 遺跡位置図

3 調査の契機と経過

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査は、個人住宅建設工事に係る緊急発掘調査である。

ほうろく屋敷遺跡では、これまでの調査で縄文時代の集落跡等が確認されているため、平成27年(2015)6月16日(火)に敷地内で文化財保護法第99条に基づき試掘調査を実施した(安曇野市教委2017)。試掘調査の結果、地表下30cmで縄文時代の遺構・遺物を確認したため、個人住宅建設工事での掘削による埋蔵文化財への影響は不可避であることが判明し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

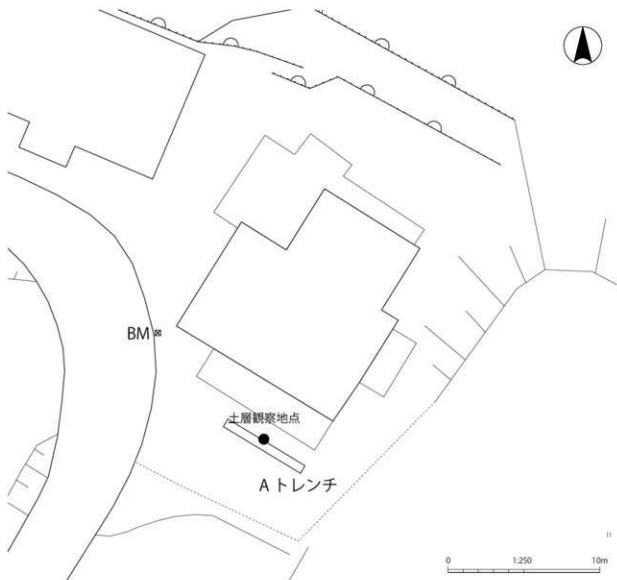
第1表 事務手続き経過

年月日	文書番号	内容
1 平成27年6月1日	27文Dエー-2第36号	平成27年5月27日付で試掘依頼を受け、市教委にて文化財保護法第99条に基づき試掘調査実施を決定する。
2 平成27年6月16日	-	上記1の試掘調査を実施する。
3 平成27年6月26日	27文Dエー-2第57号	上記2の試掘調査に係る「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
4 平成27年12月7日	-	「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」(文化財保護法第93条)が事業者(個人)から市教委に提出される。
5 平成27年12月7日	27文Dエー-2第171号	上記4届出を「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出(ほうろく屋敷遺跡)」にて、市教委教育長から県教委教育長に递達する。
6 平成27年12月14日	27教文第7-1181号	「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」にて県教委教育長から、記録作成のための発掘調査の指示通知が発出される。
7 平成27年12月15日	-	上記6通知を市教委にて受理する。
8 平成28年3月22日 ～平成28年4月19日	-	発掘調査を実施する。
9 平成28年4月19日	28文Zア-1第7号	「埋蔵物発見届」を市教委教育長から安曇野警察署長あて提出する。「埋蔵文化財保管証」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
10 平成28年4月25日	28文Zア-1第8号	「発掘調査終了報告書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
11 平成28年6月8日	28教文第20-20号	「文化財の認定及び届届届について(通知)」が県教委教育長から発出される。
12 平成28年6月13日	28文Zア-1第37号	上記11の通知を市教委にて受理する。
13 平成29年3月15日	28文Zア-1第222号	「出土文化財譲与申請書」を市教委教育長から県教委教育長あて提出する。
14 平成29年3月27日	28教文第24-42号	上記13の譲与申請に対して「出土文化財の譲与について(通知)」が県教委教育長から発出され、譲与が承認される。
15 平成29年3月29日	28文Zア-1第239号	上記14の通知を市教委にて受理する。

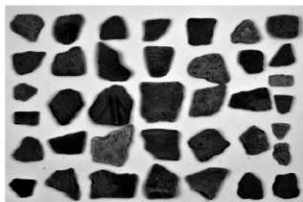
4 試掘調査

今回の個人住宅建設地付近では、平成元年（1989）度の第2次発掘調査で縄文時代の竪穴建物跡及び弥生時代の再葬墓が確認されており、今回の施工地にも埋蔵文化財が存在する可能性が極めて高いと予測していた。このため、埋蔵文化財の残存状況確認の目的で、平成27年（2015）6月16日（火）に文化財保護法第99条に基づき試掘調査を実施した（安曇野市教委2017）。

試掘調査では、既存建物南に東西6mのトレンチを設定して土層観察及び遺構・遺物の検出を試みた。調査の結果、地表下30cmでシルト質土壌を掘り込む縄文時代の遺構（種別不明）が存在し、ここから縄文時代後期の土器片が出土した。



第2図 試掘位置図



試掘調査出土土器



試掘調査出土石器

5 調査体制

調査主体 安曇野市教育委員会

	平成27年度	平成28年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	那須野雅好
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長）、 土屋和章	山下泰永（課長補佐兼係長）、 土屋和章、横山幸子
調査員	大澤慶哲、土屋和章、松田洋輔	大澤慶哲、土屋和章、松田洋輔
作業参加者	小穴金三郎、等々力哲男、中村哲也、三澤俊秀、 宮下智美	小穴金三郎、等々力哲男、中村哲也、三澤俊秀、 田多井智恵、丸山明日香、宮下智美、横山幸子
内容	発掘作業（3/22～）	発掘作業（～4/18）、整理作業（4/19～）

	平成29年度	平成30年度
事務局	教育部 文化課	教育部 文化課
文化課長	那須野雅好	那須野雅好
文化財保護係	山下泰永（課長補佐兼係長）、 土屋和章、横山幸子	山下泰永（課長補佐兼係長）、 土屋和章、横山幸子
調査員	土屋和章、松田洋輔	土屋和章
作業参加者	田多井智恵、宮下智美	田多井智恵、宮下智美、横山幸子
内容	整理作業	整理作業

6 発掘作業・整理事業の経過

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査における現場での発掘作業は、平成28年(2016)3月22日(火)～4月18日(月)に実施した。詳細は、調査日誌抄として後述する。

整理事業は、平成28年(2016)4月19日(火)～平成31年(2019)3月29日(金)の期間で断続的に実施し、本書を発行し全事業を終了した。整理事業においては、遺物の洗浄を平成28年度中に終了し、平成29年度は注記、平成30年度は図版整理、遺物実測図作成、写真撮影及び報告書執筆を行った。

7 調査日誌抄

平成28年(2016)

- | | |
|--|--|
| 3月22日(火) 表土除去開始、完了。 | 4月6日(水) SK3～6、P5～10を精査。遺構検出。 |
| 3月23日(水)～25日(金) 機材等搬入。 | 4月7日(木) 雨天により現場作業中止。 |
| 3月28日(月) 遺構検出。基準点測量。 | 4月8日(金) SK3～8、P5～12を精査。 |
| 3月29日(火) 試掘トレンチを再調査し、層位確認。集石1を精査。調査グリッド(10m)の設定。 | 4月11日(月) P13、SK9を精査。調査区清掃、全景写真撮影。16:00で現場作業終了。 |
| 3月30日(水) 遺構検出。集石1を精査。サブグリッド(2m)の設定。 | 4月12日(火) SK9を精査。下層調査のためのトレンチ(T1～5)を設定。調査区平面実測。調査区全景写真。 |
| 3月31日(木) 遺構検出。P1～4、SK1・2を精査。深掘り箇所の基本土層を確認。 | 4月13日(水) SK9を精査。T1～5を精査。 |
| 4月1日(金) 年度初日のため、現場作業なし。 | 4月14日(木) P14～18、SK5・9を精査。 |
| 4月4日(月) 雨天により現場作業中止。 | 4月15日(金) SK9・10を精査。T1～5を埋戻し。 |
| 4月5日(火) P1～4、SK1・2を精査。調査区北壁に沿ってサブトレンチを設定、遺構検出。 | 4月18日(月) 現場撤収。 |

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

安曇野市は長野県の松本盆地に位置し、西を飛騨山脈に、東を筑摩山地に画される。安曇野市明科の押野山南麓では、盆地北部を流れる高瀬川、中央付近を流れる穂高川が、盆地東縁を北流する犀川へ合流する。この後、犀川は、松本盆地を出て山峡を流れ、長野盆地へ向かう。

ほうろく屋敷遺跡は、三川合流地点から約6km北、犀川左岸の小泉集落に位置し、面積は南北約230m、東西約300mの規模とされている。犀川の蛇行により、西側の山地から東へ平坦面が張り出す地形となっており、ほうろく屋敷遺跡のある平坦面北側では、南から北東へ約6/100の勾配で傾斜して下っている。『明科町史』上巻は、明科町上押野から生坂村にかけての犀川の河岸段丘を5つに区分し、小泉集落を載せる約940×500mの平坦面を、現河床から比高10～20mの第5段丘とそれ以下の氾濫原及び扇状地に区分した（明科町史編集会編1984）。ほうろく屋敷遺跡第1・2次発掘調査では、『明科町史』上巻において氾濫原とされた面を、さらに段差1～2mの4段に細分し、発掘調査地は上位から2段目であるとした（明科町教委1991）。現在では、ほうろく屋敷遺跡は主に2段目に広がっていると考えられている。

第5次発掘調査区は、第1・2次発掘調査地と同じ面上に位置し、北側は下位の面との境界をなす小崖地形となっている。標高は約511mで、標高約500mの犀川現河床と比高約11mである。

2 歴史的環境

ほうろく屋敷遺跡の所在する安曇野市明科地域は、松本盆地東縁の北側とその東方に広がる山地からなる。犀川が形成した河岸段丘上では、豊科田沢地区から明科南陸郷地区まで遺跡が断続的に分布しており、山間部には古墳や山城等が築かれている。以下では、主に安曇野市明科地域について歴史的環境を記載する。

現在までに、安曇野市では旧石器時代の遺跡は確認されていないが、明科中川手の吐中遺跡では、昭和31年（1956）にオオツノジカの化石が発見された記録がある（明科町史編集会編1984）。

市内で人々の生活を確実に確認できるのは縄文時代早期以降で、明科中川手のこや城遺跡、上手屋敷遺跡等で押型土器の破片、ほうろく屋敷遺跡で絡糸体圧痕土器が出土している。縄文時代前期には、明科中川手の上手屋敷遺跡、明科東川手の潮遺跡群塩田若宮遺跡、明科七貴のみどりヶ丘遺跡、ほうろく屋敷遺跡で集落が営まれた。縄文時代中期になると、市内全域で遺跡数は増加する。明科光の光遺跡群北村遺跡では、長野自動車道建設に先立つ発掘調査で縄文時代中期後葉から後期の土壌から多量の埋葬人骨が発見された（長野県埋文セ1993）。縄文時代中期後葉～後期は、こや城遺跡、塩田若宮遺跡でも集落跡を確認している。縄文時代晩期には、明科七貴の荒井遺跡で浮線文が施された水Ⅰ式段階の鉢が採集されている（明科町史編集会編1984）。

弥生時代の主要な遺跡としては、ほうろく屋敷遺跡とみどりヶ丘遺跡が挙げられる。ほうろく屋敷遺

跡では第1・2次発掘調査で4群16基の再葬墓とそれに伴う土器30個体余りが出土した。また、みどりヶ丘遺跡からは、宅地造成に伴う発掘調査で弥生時代前・中期の土器・石器が多量に出土した(太田・河西1966)。特に集石遺構とされる礫群からは、変形工字文や磨消縄文が施された土器片に大型蛤刃石斧や石包丁が共存している。

明科地域における古墳時代前・中期の古墳及び集落の様相は、未だ不明確なままである。犀川右岸の段丘上に所在する龍門瀨遺跡で、古墳時代前期の土器が出土しているが、出土状態や遺構等は不明確である。古墳時代後期になると、古墳及び集落がつくられる。明科東川手の潮古墳群は、円墳を主体として構成され、発掘調査によって7～8世紀に比定される(明科町教委2005)。潮古墳群から会田川を挟んだ明科中川手の明科遺跡群 栄 町遺跡では、昭和53年(1978)の明科町役場議会棟建設にかかる発掘調査で6世紀後半に比定される住居跡が確認された(明科町史編集会編1984)。この住居跡は一辺5mほどで、直径15cm程度の河原礫を一面に敷き詰めた特異な遺構である。これ以降、この遺跡ではこれまでに4次にわたる発掘が実施され、古墳時代後期の集落の広がりが把握されてきた。

奈良時代になると明科中川手で7世紀後半創建と考えられる寺院跡が確認されており、所在地から明科廃寺と呼ばれる。明科廃寺では、平成11年(1999)に行われた発掘調査によって掘立柱建物跡3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物跡1棟などに伴って多量の瓦が出土した(明科町教委2000)。昭和28年(1953)の発掘調査と併せ、古代瓦のほか鷓尾や瓦塔が確認され、県内で最も古い時期の寺院のひとつとして注目されている。

明科地域には中世の城館跡が多く残されており、こや城遺跡、茶臼山遺跡、上手屋敷遺跡、塔ノ原城址などで遺物の出土がある。このうち塔原氏居館跡とされる上手屋敷遺跡は、平成元年(1989)と平成15年(2003)に発掘調査が実施され、内耳土器や青磁碗のほか安山岩製の宝篋印塔の相輪などが出土した(明科町教委2004)。

3 ほうろく屋敷遺跡の概要

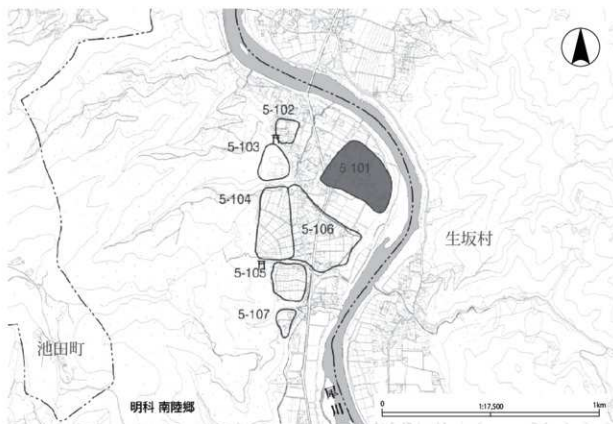
ほうろく屋敷遺跡は、第1～4次の調査によって縄文時代早期末～後期中葉、弥生時代中期初頭～平安時代、中・近世にわたる遺跡であることが判明している。農業基盤整備事業に伴い昭和63年(1988)度・平成元年(1989)度に明科町教育委員会が実施した第1・2次調査では、約13,000㎡を発掘し、縄文時代68棟、弥生時代後期1棟、平安時代20棟の堅穴建物跡を確認したほか、縄文時代の3箇所の土器集中区から多量の土器類、土偶、土製品、石器が出土した(明科町教委1991)。さらに、調査区西側では、ほぼ全面にわたって縄文時代中期以降の集石や配石が広がっており、ここで弥生時代中期初頭の土器棺再葬墓4群16基も確認された。

平成12年(2000)度に実施した第4次調査では、個人住宅建設に際し明科町教育委員会が150㎡を発掘した(明科町教委2001)。調査区は、第1・2次調査の調査区の中央付近にあたり、縄文時代中期初頭～後葉の堅穴建物跡14棟を確認した。

なお、ほうろく屋敷遺跡は、これまでの発掘調査で石器未製品、剥片類、原石が多量に出土することから、石器製作を担う集落である可能性が指摘されている(明科町教委2001)。

第2表 ほうろく屋敷遺跡発掘調査記録

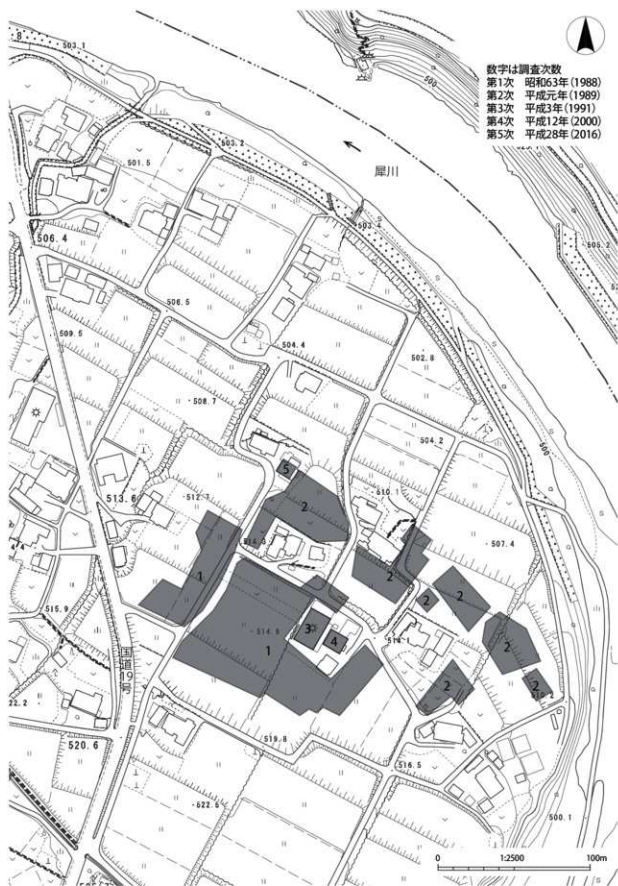
調査次	調査年	調査原因	遺構・遺物の概要	文献
第1次	昭和63年	農業基盤整備事業	竪穴建物跡（縄文68、弥生1、平安20）、掘立柱建物跡3、弥生再葬墓4群16基、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器	明科町教委1991
第2次	平成元年			
第3次	平成3年	車庫	竪穴建物跡、縄文土器、石器	未報告
第4次	平成12年	個人住宅	竪穴建物跡（縄文16）、縄文土器、石器	明科町教委2001
第5次	平成28年	個人住宅	土坑10、縄文土器、石器	本書



第3図 ほうろく屋敷遺跡付近の遺跡（安曇野市埋蔵文化財包蔵地図（平成22年（2010）3月31日調製）を加工）

第3表 ほうろく屋敷遺跡付近の遺跡

No.	遺跡名	種類	時代	No.	遺跡名	種類	時代
5-101	ほうろく屋敷遺跡	集落跡	縄文早期末以降	5-105	上ノ段遺跡	散布地	古代
5-102	高松寺跡	社寺跡	中世・近世	5-106	北原遺跡	集落跡	縄文・古代
5-103	萬平遺跡	散布地	縄文	5-107	棚平遺跡	散布地	古代
5-104	竹原遺跡	散布地	縄文・古代				



第4図 調査区配置図

第3章 調査の方法

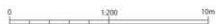
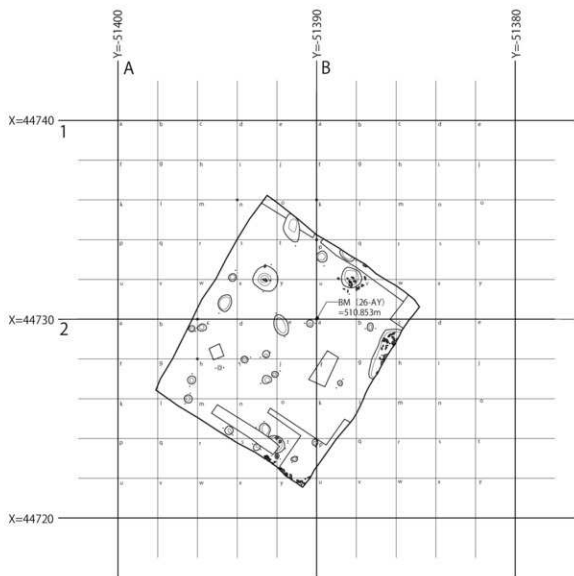
ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査の調査原因である個人住宅建設の事業地が、周知の埋蔵文化財包蔵地内であり、平成27年（2015）に実施した本件事業に先立つ試掘調査結果から施工地に遺構が良好に残存していることが確認されたことにより、記録保存のための発掘調査を念頭に事業者と保護協議を継続した。試掘で確認された遺構深度は約30cmで、個人住宅建設工事での掘削によって埋蔵文化財への影響が不可避であることが判明したため、事業者と保護協議を再度実施し、発掘調査を実施して遺跡の記録保存をはかることとした。

発掘調査は、住宅建設範囲全体を対象とした。調査面積は100㎡である。調査にはグリッド法を採用し、測量業者によって調査地全体に1辺10mの大グリッド（A1・A2等）を設定し、この大グリッドを分割して1辺2mの小グリッド（a～y）を設定した（第5図）。なお、本件発掘調査の基準点測量では世界測地系を採用している。遺構の所在、遺物の出土位置等は、この調査用グリッドを基本として記載した。また、標高の基準としてグリッド測量実施の際にベンチマークを設定した。ベンチマークはグリッド杭のB2（測量点の名称は26-AY）とし、標高は510.853mである。表土除去は、建設用重機を用いて現代の造成土及び遺構検出面直上までの堆積土を除去し、遺構検出面（4層上面）直上から下の土層の掘削及び遺構検出は人力で行った。4層上面検出遺構の調査を完了した後に、さらに下層に遺構等が存在するか確認するため、グリッドに沿って東西方向に5箇所の特レンチ（T1～5）を設定し5層までの掘り下げを実施した（第7図）。この結果、ピット等の小規模な遺構を確認したが、堅穴建物跡、土坑等は存在しなかったため埋戻しを実施した。

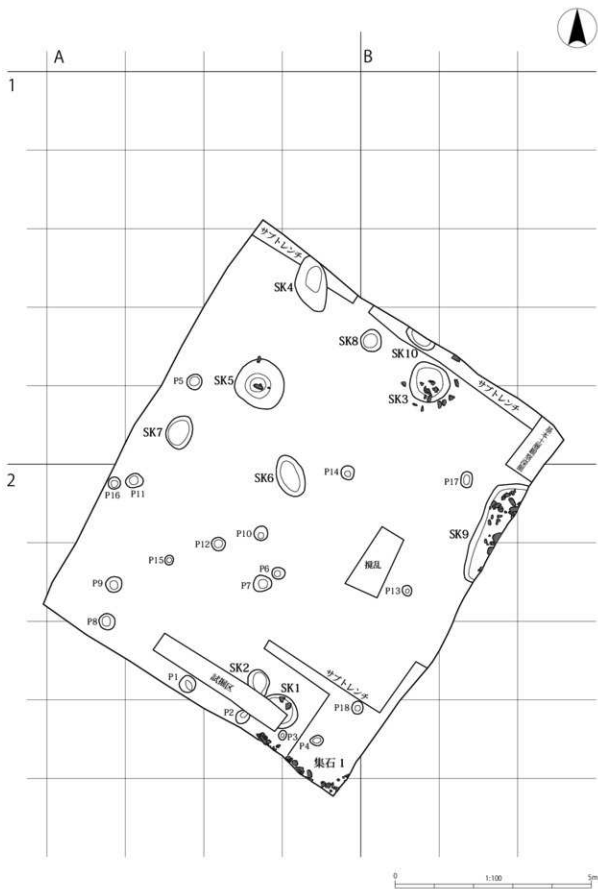
遺物の取り上げは基本的に遺構ごとに行い、遺構外出土遺物についてはグリッドごとに行った。遺構観測は調査用グリッドを基準として、調査員・作業員が現場で簡易遺方測量を実施した。記録写真は現場・整理ともにデジタルカメラを使用した。

整理作業は、現場作業終了後に室内で行い、土器等の洗浄、注記、接合、実測、属性観察、図版作成・調整、写真撮影等及び報告書作成を行った。注記は、試掘出土遺物以外はインクジェット式の注記機器を使用した。記載には、遺跡略号「HUR16」を使用し以下の例によった。

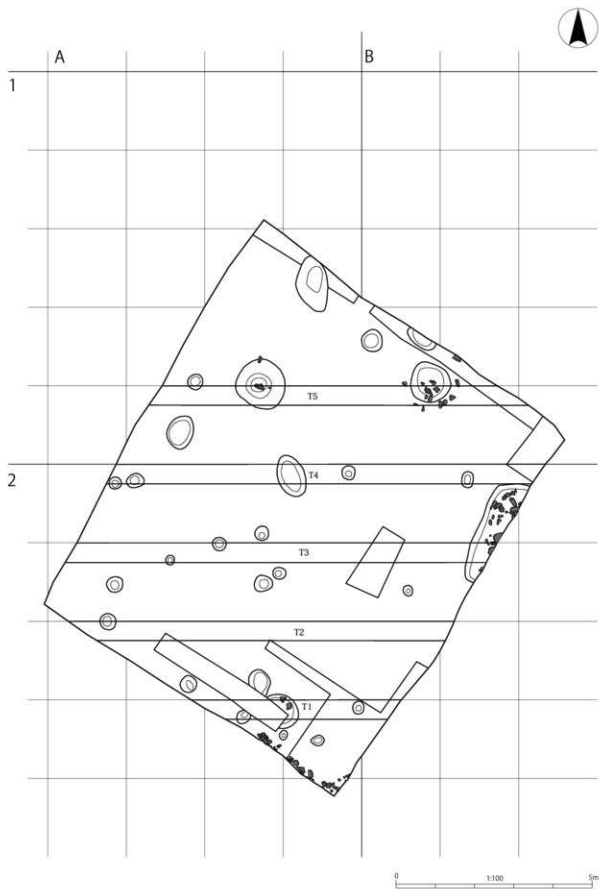
内容	注記
試掘出土遺物	2015. 6.16 ほうろく屋敷 試掘
出土位置記録遺物	HUR16 No.■ 遺構名
出土グリッド記録遺物	HUR16 ■グリッド



第5図 グリッド配置図



第6図 調査区全体図



第7図 遺構精査後トレンチ配置図

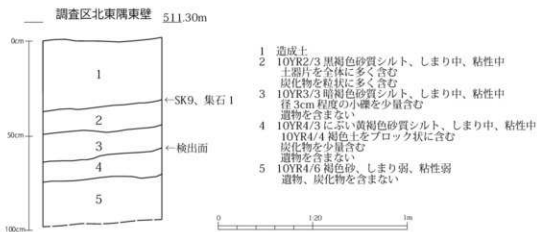
第4章 層序

今回の調査区で観察した基本土層の詳細は、第8図のとおりである。基本土層の観察は、調査区北東隅の東壁で実施し、地表面から深度約100cmまでに5層を確認した。このうち1層は現代の造成土である。2層は黒褐色砂質シルトで、土器破片、炭化物を多く含む。SK 9及び集石1は、2層上面で検出した。3層は暗褐色砂質シルトで、無遺物層である。4層上面で遺構平面形が確認できたため、これを検出面として遺構検出を行った。なお、4層上面の遺構精査後、下層に古い文化層があるかトレンチ法にて調査したところ5層を確認し、ピット数基を検出した。

第1・2次調査での土層は、次のとおりである（明科町教委1991）。20～30cmの耕土層、30～50cmの黒色砂質土もしくは黒色砂礫層で配石はこの層の上面で検出できる。その下層は黒灰色の砂礫もしくは砂層で、縄文時代中期の遺構はこの面から検出できる。さらに灰色から黒灰色砂質土の20～50cmの堆積があり、この中からは縄文時代初期初頭～中葉の遺物が出土している。

第4次調査での土層は、次のとおりである（明科町教委2001）。20cmあまりの表土の直下に黒色土が20～30cm堆積して縄文時代中期から後期の遺物包含層となっており、その下の黒褐色土層（厚さ30～40cm）上面が縄文時代中期後半の遺構面と考えられている。この黒褐色土層内に、縄文時代中期前半の包含層と遺構面が存在すると推定された。その下層は有機物が混入して堆積した砂層で、この砂層上面がおそらく縄文時代中期初頭の遺構面となり、砂層内が縄文時代前期の遺物包含層になる可能性が高いと推測できる。

第5次発掘調査の基本土層を過去の土層と対比すると、2層は遺跡内の広範囲に分布する遺物包含層で、縄文時代中期～後期の形成である。また4層上面は、過去の調査における縄文時代中期後半の遺構掘込み面と一致する。4・5層は、縄文時代中期前半以前に形成された可能性が高いが、今回の調査では主体的に遺構・遺物を確認していないため、堆積時期は不詳である。



第8図 基本土層

第5章 遺構

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査で確認された主な遺構は、土坑10基、集石及びピットで、縄文時代中期後半、後期前・中葉、晩期後葉～弥生時代中期前半に属すると考えられる。検出層位としては、SK 9及び集石1の配石を、基本土層2層上面で確認した。これ以外の遺構は、基本土層4層上面での検出である。以下に、それぞれの詳細を記載する。

1 土坑

(1) SK 1

検出層位 基本土層4層上面

位置 A2n・o・s・tグリッド

平面形・規模 1.0×(0.7)mで楕円形を呈し、長軸方向はN47°Wである。なお、推定短軸長は0.85mである。

壁・堆積土 残存している壁高は約0.3mで、緩やかに立ち上がる。覆土は2層を確認した。

重複関係 SK1の半分程度を試掘トレンチに切られている。

時期 縄文時代後期前葉

(2) SK 2

検出層位 基本土層4層上面

位置 A2nグリッド

平面形・規模 (0.6)×0.5mで楕円形を呈し、長軸方向はN5°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は0.1mで、緩やかに立ち上がる。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK2の南側を試掘トレンチに切られている。

時期 縄文時代後期前葉(小破片のみで不明確)

(3) SK 3

検出層位 基本土層4層上面

位置 B1p・q・u・vグリッド

平面形・規模 直径1.0mの円形を呈する。円形のため、軸方向は不明である。

壁・堆積土 残存している壁高は0.6mで、緩やかに立ち上がる。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK3と重複関係にある遺構はない。

時期 縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半

(4) SK4

検出層位 基本土層4層上面

位置 A1o・tグリッド

平面形・規模 (1.45)×0.8mで楕円形を呈し、長軸方向はN5°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は0.3mで、緩やかに立ち上がる。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK4北側がわずかに調査区北壁にかかる。

時期 縄文時代後期前葉か

(5) SK5

検出層位 基本土層4層上面

位置 A1s・t・x・yグリッド

平面形・規模 直径1.0mの円形を呈する。円形のため、軸方向は不明である。

壁・堆積土 残存している壁高は0.4mで、覆土1層下面付近に段をもつ。

重複関係 SK5と重複関係にある遺構はない。

時期 縄文時代後期前葉（縄文時代中期後半の土器片混入）

(6) SK6

検出層位 基本土層4層上面

位置 A1x・y、A2d・eグリッド

平面形・規模 1.1×0.7mで楕円形を呈し、長軸方向はN20°Wである。

壁・堆積土 残存している壁高は0.2mで、緩やかに立ち上がる。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK6と重複関係にある遺構はない。

時期 縄文時代後期前葉か（小破片のみで不明確）

(7) SK7

検出層位 基本土層4層上面

位置 A1wグリッド

平面形・規模 0.9×0.65mで楕円形を呈し、長軸方向はN20°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は0.2mで、緩やかに立ち上がる。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK7と重複関係にある遺構はない。

時期 縄文時代後期前葉

(8) SK8

検出層位 基本土層4層上面

位置 B1pグリッド

平面形・規模 直径0.55mの円形を呈する。円形のため、軸方向は不明である。

壁・堆積土 残存している壁高は0.1mで、やや窪んでいる程度である。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK8と重複関係にある遺構はない。

時期 不明

(9) SK9

検出層位 基本土層2層上面

位置 B2b・c・gグリッド

平面形・規模 (5.3) × (1.5) mで隅丸方形を呈し、長軸方向はN20°Eである。

壁・堆積土 残存している壁高は0.55mで、緩やかに立ち上がる。覆土は2層を確認し、覆土2層埋没後に基本土層2・3層が堆積し、基本土層2層上面から覆土1層が掘り込まれている。このため、覆土1層と覆土2層は、垂直に重複する別の遺構の可能性が高いが、調査段階では同一の遺構として把握し記録作成を行ったため、この報告でもSK9としてまとめて記載する。遺構検出時、基本土層2層上面で、長さ50～80cm程度の垂門礫が多く散乱することを確認した。また、覆土中でも長さ30～50cmの垂門礫が多量に含まれることを確認している。

重複関係 SK9の東側は調査区外に広がる。

時期 縄文時代中期後半

その他 SK9は、今回検出した他の土坑と比較して規模が大きく、遺物・礫の混入度合いも大きいことから、堅穴建物跡もしくは土壇などの遺構である可能性も考えられる。平面的には、第2次調査で検出した敷石10号住と近い。

(10) SK10

検出層位 基本土層4層上面

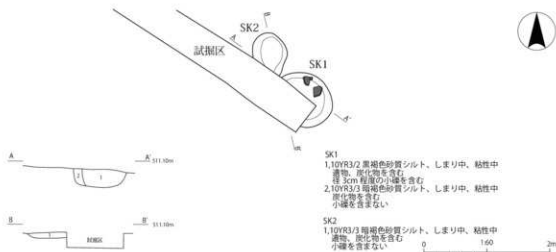
位置 B1pグリッド

平面形・規模 0.8 × (0.3) mで楕円形を呈し、長軸方向はN55°Wである。

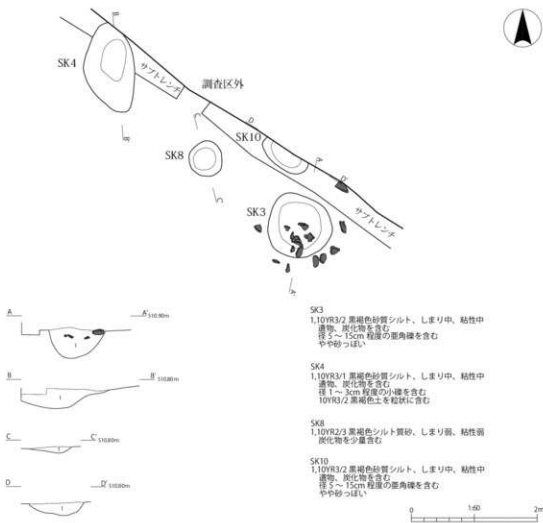
壁・堆積土 残存している壁高は0.2mで、緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。覆土は1層を確認した。

重複関係 SK10の北側は、調査区外に広がる。

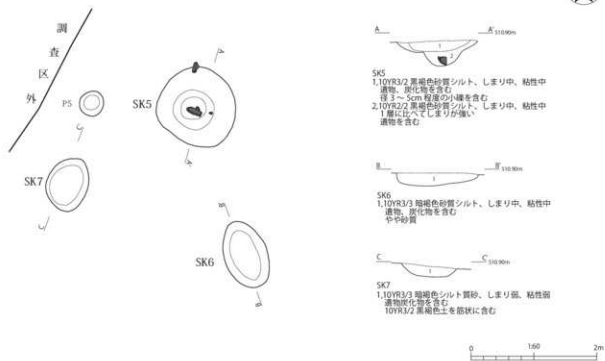
時期 不明



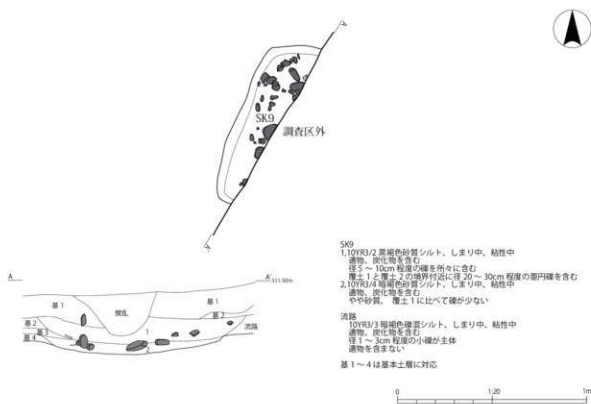
第9図 SK1・SK2



第10図 SK3・SK4・SK8・SK10



第11図 SK5・SK6・SK7



第12図 SK9

2 集石

(1) 集石 1

検出層位 基本土層 2層上面

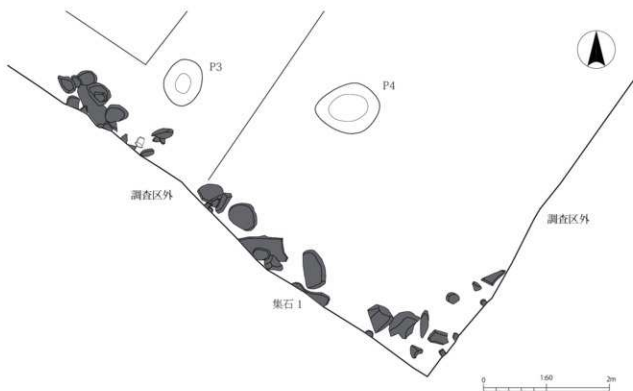
位置 A2s・t・yグリッド

平面形・規模 (2.5) × (0.7) mの範囲。南東ともに調査区外に広がる。

重複関係 調査区内で確認した遺構で集石1と重複関係にある遺構はない。

時期 縄文時代後期前葉

その他 集石1の検出層位は、表土直下の基本土層2層上面であること及び、ほうろく屋敷遺跡第1・2次発掘調査で確認された配石の北辺に平面的に一致することから、この配石の一部と考えられる。



第13図 集石 1

第6章 遺物

1 土器

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査で出土した土器類はいずれも小破片であり、完形に復元できる個体はない。よって詳細な編年的記載は困難であるため、以下に各資料の特徴を記載する。今回の調査で精査した遺構の埋没年代については、ここに記載する各遺構出土土器の大別時期とした。

なお、土器の記載については、北村遺跡の分類を参考とした（長野県埋文セ1993）。時期区分は大別時期のみにとどめ、縄文時代前期後葉、縄文時代中期後半、縄文時代後期前葉、縄文時代後期中葉、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半を基本とした。

(1) 試掘（1～9）

今回の発掘調査に先立つ試掘でのトレンチは、調査区内南に設定した。調査の結果、試掘トレンチがSK1、SK2、P2を切る形になった。このため、試掘調査出土土器もSK1、SK2に帰属する可能性が高い。

1は、口縁部が肥厚し端面に刺突を巡らせる。2も口縁部がやや肥厚し、端部で強く内折する。7は、体部上半から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形である。体部上半に文様帯を有し、上下2条の沈線で縄文帯を区画している。9は、大波状口縁を有する深鉢の突起部分である。突起の頂点から粘土紐貼付による隆線を垂下させている。

これらの特徴から、1～9はいずれも縄文時代後期前葉に比定できる。

(2) SK1 (10)

SK1出土土器で資料化できたものは1点のみであるが、前述のとおりSK1は試掘トレンチに切られているため、内容的には試掘調査出土資料が参考になる。10は、無文の鉢で内面の口縁部下に1条の沈線を有する。このような特徴から、SK1出土土器は縄文時代後期前葉に比定した。

(3) SK3 (11～22)

SK3出土土器は、12点を資料化した。12は、注口土器の体部上半である。沈線文を施した後丁寧なミガキ調整を行っている。器壁は薄く、丁寧なつくりとなっており、縄文時代後期前葉の特徴を有する。

13・14はともに深鉢で、13は、口縁部端面を押圧し、全体的に粗いナデで調整する。14は、外面の口縁部直下に幅広く浅い横走沈線1条を有する。これらは、縄文時代晩期後葉の特徴と考えられる。

15～17は、いずれも壺の頸部及び体部上半である。15は、横走する沈線が少なくとも8条観察できる。16は、細密条痕を沈線で区画し、沈線外を磨消手法で無文化している。17は、外面に横方向の条痕を施

し、内面は粗いナデ調整を行っている。18・19は、器種不明の底部破片である。このうち19は、体部下半が残存しており外面に沈線の痕跡を観察できるが、文様構成をなすかは不明である。これらの土器は、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半に比定できる。

以上の出土土器の特徴から、縄文時代後期の土器片が一定の割合で存在するものの、SK3の埋没は縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半と推定できる。

(4) SK4 (23)

SK4出土土器は1点を資料化した。23は、無文の鉢の口縁部である。調整は内外面ともにナデで、内面がより丁寧に調整されている。この土器は、縄文時代後期前葉に比定した。

(5) SK5 (24～30)

SK5出土土器は、7点を資料化した。24は、地文縄文のみの深鉢体部破片である。器厚、胎土、焼成の特徴から縄文時代中期後半の可能性が高い。

25・26はいずれも無文の深鉢の口縁部である。内外面ともに、ナデで調整される。27も深鉢の口縁部で、口縁部下にLR縄文を施した後、上端を横走沈線で区画し口縁部をナデ調整している。これらの特徴から、25～27は縄文時代後期前～中葉に比定できる。

28・29は、深鉢の体部破片である。28は条痕地文、29は縄文地文となっている。30は、壺の体部で上半には櫛歯状工具で横方向に施文される。いずれも明確な意匠は不明だが、28～30はこれらの特徴から弥生時代前半期に比定できる。

(6) SK6 (31)

SK6出土土器は、1点を資料化した。31は、体部にくびれを持つ深鉢のくびれ部で、沈線で意匠を描く。小破片のため、文様全体は不明である。器形及びやや細めの沈線という特徴から、縄文時代後期前葉と推定できる。

(7) SK7 (32)

SK7出土土器は、1点を資料化した。32は、鉢の体部破片である。やや膨らむ体部下半に、磨消縄文で意匠を描く。器形及び文様の特徴から、縄文時代後期前葉に比定できる。

(8) SK9 (33～58)

SK9出土土器は、26点を資料化した。35は、深鉢の口縁部及び体部である。無文で口縁部下に粘土紐貼付で横方向の隆線を1条作り出している。34～36は、渦巻文を持つ深鉢である。34は、沈線で渦巻文を描出し、35・36は、隆線で渦巻文を作出している。39は、深鉢の把手部分である。42の深鉢体部は、縦方向に伸びる隆帯間を短沈線で充填している。43・44も深鉢体部で、いわゆる綾杉文を簡略化した意匠で、沈線または隆線を用いた縦区画間を斜行する短沈線を疎らに充填する。46は、深鉢の口縁～体部

である。口縁部と体部の境界に横方向に走る1条の隆線を作出し、体部に縄文を充填している。51も深鉢で、隆線で曲線的な意匠を描き、隆線間を短沈線で充填している。隆線・沈線ともに、丁寧なつくりである。以上33～55は、深鉢主体の土器組成、厚い器壁、渦巻文・綾杉文等の文様・意匠から縄文時代中期後半に比定した。

56は、体部にくびれをもつ深鉢のくびれ部で、磨消縄文で文様を描く。小破片のため意匠全体は不明である。SK9では、この資料のみ縄文時代後期前葉と推定できる。

57・58は、底部破片で所属時期は不明である。

(9) SK10 (59)

SK10出土土器は、底部破片1点を資料化した。残存している体部下半は、ナデ調整で無文であり、底面もナデ調整を施している。所属時期は、不明である。

(10) 集石1 (60～72)

集石1出土土器は、13点を資料化した。60・61は、共に特定の文様を持たない深鉢である。60は、口縁部端面直下で強く内屈し端面が肥厚する器形で、端面直下まで縄文が施される。61は、口縁部と体部の境界に横方向に走る1条の隆線を作出し、体部に縄文を充填している。これらは、縄文時代中期後半に比定できる。

62～64は、鉢である。62は、口縁部直下に横走る鎖状隆線を貼り付けている。63は、外反して開く口縁部の外面端面直下に同一工具で横走沈線と刺突を施し、意匠を描出している。64は、体部上半破片で、縦方向に鎖状隆線を貼付している。65～68は、深鉢の口縁部破片である。65は、やや内弯気味に立ち上がる口縁部の端面直下まで磨消縄文で意匠を描く。66は、くびれをもつ器形で大波状口縁を呈する。沈線で意匠を描くが、小破片のため全体は不明である。67・68は、ナデで調整された無文の深鉢である。以上、62～68は、器壁が60・61に比較し薄いこと、鎖状隆線や磨消縄文を用いて意匠を構成することから縄文時代後期前葉に比定できる。

69～72は、底部破片で所属時期は不明である。

(11) P1 (73～74)

P1出土土器は、2点を資料化した。73・74は、共に深鉢の口縁部破片である。いずれも、太めの工具を使用して沈線文を描く。口縁部端面を屈曲させ、横走沈線を施す等の特徴から縄文時代後期前葉と推定できる。

(12) P2 (75～78)

P2出土土器は、4点を資料化した。75は、深鉢の体部に太めの工具で縦区画の沈線を施し、その両脇に短沈線で斜線を充填する。文様は綾杉文と推定でき、縄文時代中期後半に比定できる。

76・77は、口縁部の開く鉢の口縁部破片である。いずれも、口縁部付近に沈線で意匠を施し、端部

直下は無文となっている。器形及び装飾の特徴から、縄文時代後期前葉に比定できる。

78は、器種不明の底部破片で、体部下半に横走る隆線を1条もつ。

(13) P15 (79)

P15出土土器は、1点を資料化した。79は、深鉢の口縁部破片である。口縁部平面形態は、大波状を呈し、端面下に広く浅い沈線を施す。縄文時代中期後半に属する可能性が高い。

(14) トレンチ (80~85)

遺構精査後、下層検出用に設定したトレンチからの出土土器6点を資料化した。

T3出土土器は80~81で、いずれも深鉢である。80は、2条1単位の半截竹管状工具で縦横に沈線を描く。縄文時代前期後葉と推定できる。81は、櫛歯状工具で間隔のある条線を曲線状に施している。これは、縄文時代後期前葉に比定した。

T4出土土器は82~85で、いずれも深鉢である。82は、沈線で渦巻文を描き、沈線間に斜行する短沈線を充填する。83・84は、それぞれ沈線・隆線で意匠を作出するが、小破片のため文様全体は不明である。85は、器種不明の底部破片で体部下半に縄文が残る。器面が摩耗しており、原体は不明である。以上82~85は、渦巻文等の装飾と、器種構成、器壁の厚みから縄文時代中期後半に比定できる。

(15) 遺構外

86~111は、グリッドごとに出土位置を記録した土器である。86~93は、縄文時代中期後半に比定できる土器を掲載した。いずれも深鉢である。88は、隆線で曲線的な区画線を作成し、区画内に縄文を充填する。89は、隆線で渦巻文を描いている。92・93は、沈線で綾杉文を簡略化した意匠を描いている。

94~107には、縄文時代後期前葉に比定できる土器を掲載した。94・98は、鉢の口縁部・体部上半破片で、鎖状隆線を貼付している。95・96は、口縁部外面に、縦方向の短沈線を密に施す。97は、外面に貼付された把手で、円孔をもつ。99・100は、磨消縄文で意匠を描くが、全体は不明である。

108は、注口土器の体部で、薄い器壁と幾何学的な意匠及び丁寧なミガキ調整が特徴である。縄文時代後期中葉に比定できる。110は、細密条痕を施した深鉢体部で縄文時代晩期後半の可能性が高い。

112~117は、調査区南壁清掃時の出土土器である。112は、鉢の口縁部で、縄文施文後に沈線と刺突で意匠を描く。113~117は、所属時期不明である。

118~147は、遺構検出時の出土土器である。118は、縄文時代前期後葉の浅鉢である。121は、縄文時代中期後半の深鉢の口縁部から体部上半破片である。

120~136には、縄文時代後期前葉に比定できる土器を掲載した。120は、鉢の口縁部で、端部に横方向の沈線1条を施し、突起がつく。122も鉢の口縁部で、大きく開いた口縁が端部で強く内折する。口縁内面には3条以上の平行沈線が施される。125は、縦方向の粘土紐貼付にキザミを施して、鎖状隆線を表現している。126・127は、鉢の体部破片である。126は、2条1単位の平行沈線で曲線的な意匠を描く。127は、渦巻文の一部と考えられる。128~132は、深鉢口縁部破片である。いずれも無文で、外面を丁寧な

ナデで仕上げている。口縁部端部の断面形態が方形に近い特徴を有する。133は、底部から口縁部にかけて直線的に大きく開く深鉢の体部破片である。磨消縄文手法を用いた帯状文を直線的に用い、V字状の意匠を描出している。134・135も深鉢体部で、沈線で曲線と直線を組み合わせた意匠を描いている。

137・138は、縄文時代後期中葉の土器である。いずれも浅鉢で、137は内面に、138は外面に縄文と平行沈線による意匠を描く。

139～143は、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半の土器である。139は、深鉢の口縁部で、口縁端部に連続して押圧を施し、外面の口縁部直下に浅く幅広の凹線2条を走らせる。140・141も同様に、外面の口縁部直下に浅く幅広の凹線2条が施される。139～141は、縄文時代晩期後葉の深鉢の特徴を顕している。142は、壺の口頸部で、口縁は弱く外反して開く。装飾はなく、丁寧なナデで調整される。143も壺で、体部上半で丸みを持つ。装飾として、横方向に展開する帯縄文を磨消縄文手法で描出している。

144は、土師器環の口縁部破片である。小破片であるため器形全体は不明であるが、ロクロ成形の土師器であり、平安時代に属すると推定できる。ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査では、平安時代の遺構は確認していないが、第1・2次調査では平安時代の竪穴建物跡20棟が確認されており、9世紀後半～10世紀前半、及び11世紀後半～12世紀に集落が存在したことがわかっている（明科町教委1991）。

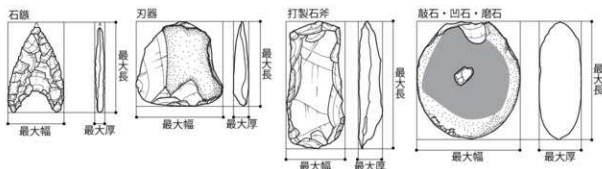
2 土製品

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査では、ミニチュア土器1点がA1wグリッドから出土した。器形は浅い鉢形で、器高は1.5cmである。手づくねで成形し、無文となっている。

3 石器

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査で出土した石器類のうち、定型的な石器及び使用痕跡の認められる鏢等を報告の対象とし、40点を図化した。なお、出土石器類は総重量約18kgである。石器の分類については、遺跡間比較・検討の必要性から形態的分类を念頭におき、北村遺跡の報告書（長野県埋文セ1993）に準じ、上峯篤史の分類（上峯2018）、境窪遺跡の分類（松本市教委1998）を参考にした。

なお、計測箇所は第14図のとおりである。



第14図 石器の計測部位

(1) 石鏃 (1~16)

平面形を概ね三角形に成形された小型の両面加工石器を抽出した。形態的視点から基部形状に着目し、第4表のとおり分類する。

第4表 石鏃の分類

大別	細別
Ⅰ 無茎	A 平らで直線的な基部を呈するもの
	B 1 基部が内湾し挟りが長さの1/3以下のもののうち、開き角120度以上のもの
	B 2 基部が内湾し挟りが長さの1/3以下のもののうち、開き角120度以下のもの
	C 外湾した基部を呈するもの
Ⅱ 有茎	D 1 基部を有するもので、基部が全体の1/3以下のもの
	D 2 基部を有するもので、基部が全体の1/3以上のもの

石鏃は16点を資料化した。1・2は、いずれもチャート製の凹基無茎鏃で、浅い挟りをもつ。2は、微細な縁辺加工が等間隔に並ぶ。3は、有茎鏃だが、茎が欠損しているため全形は不明である。4・5も凹基無茎鏃で、挟りが深い。6は、黒曜石製石鏃だが機能部と基部が欠損している。7・8は、チャート製の石鏃未製品である。10の未製品を含め最大長3.2~4.5cm、重量6.2~13.8gであり、完成品の法量と比較して大型である。9・11・13・16も凹基無茎鏃で、挟りは深い。12は、黒曜石製の凸基有茎鏃で、全体の3分の1以下の基部を有する。今回の資料で明確に凸基鏃と認定できたのは、12のみである。他の資料と比較すると小型で、重量は0.6gと最小値である。

(2) 石錐 (17~19)

尖頭部をもつ形状、ないしは棒状に成形された小型の両面加工石器を抽出した。石錐の分類は加工部位に着目し、第5表のとおりとする。また、刃部作出法には両面からと片面からの2種類がある。この他、機能部断面形として、円形、菱形、三角形の細別を想定した。

第5表 石錐の分類

大別	細別
Ⅰ 機能部のみを加工	A 素材の一部にのみ調整を施すもの
	B 1 素材の長い2側面にわたり押圧剥離を施すもののうち、先端機能部と基部の区別が不明瞭なもの
	B 2 素材の長い2側面にわたり押圧剥離を施すもののうち、先端機能部と基部の区別が明瞭なもの
Ⅱ 全体を加工	C 先端機能部と基部の区別が明瞭なもの
	D 先端と基部の区別がなく、両端の尖ったもの

石錐は3点を資料化した。17は、素材剥片の一部にのみ調整を施し短い機能部を作出している。18は、チャート製の石錐で先端機能部と基部の区別が不明瞭なものである。先端機能部は、欠損している。19は、全体を加工し一端のみに機能部を作出している。

(3) 刃器 (20)

剥片のうち、少なくとも1辺に連続的な調整を加えて刃部を作出した石器を抽出した。北村遺跡の報告書では、大小2種の大別、製作法として剥離獲得した素材をそのまま使用する場合(第1種)と、素材の一部に加工を施す場合(第2種)の分類、さらに技術形態的な視点から大型(大形)で4類(A~D)、小型(小形)で3類(A~C)の類別を行っている。

20は、最大長6.8cm、最大幅7.0cmで上記分類では大型とされ、素材の一部に加工を施していることから第2種に分類できる。形態は、円形よりは楕円形に近く断面三角形となるためA類に該当し、最大厚が1.3cmであるため、厚さ2.0cm前後を基準とするA1類ではなく、より薄手のA2類となる。なお、刃部の形態は直刃に近い。

(4) 打製石斧 (21~29)

礫または大型の剥片を素材とした打製石器で、両側縁の作出または刃部の形成によっていわゆる斧形に成形したものを抽出した。北村遺跡の報告書では、全体形を7類11細別している。

第6表 打製石斧の分類

大別	細別
A類	A 全体の形状を長方形に整えるもの
B類	B1 全体を楕円形に整えるもの
	B2 B1を基本とし、両端のやや尖るもの
C類	C1 全体を半月形に整えるもの
	C2 C1を基本形とし、1側縁の挟りが強いもの
D類	D 全体を三角形に整えるもの
E類	E1 全体を台形に整えるもの
	E2 E1を基本形態とし、2側縁に挟りを強く入れるもの
F類	F1 全体の形状を瓢形に整えるもの
	F2 F1類似の形態を呈し、端部の尖るもの
G類	全体を8の字形に整えるもの

打製石斧は9点を資料化した。21は、第5次調査では最小の打製石斧である。刃部は素材剥片剥離時の縁辺を利用しており、背面の頭部・刃部に自然面を残す。22は、頭部が尖り両側縁は並行になるよう成形される。刃部から4分の1程度が、使用によって摩耗している。23は、背面がほとんど自然面であり、刃部が欠損している。24は、台形を呈し刃部は斜行する。全体の4分の1程度が使用によって摩耗している。25は、長方形を呈し、頭部は斜行する。胴部中央付近の側縁には浅い挟りを有し、刃部は直線的に成形されている。26は、打製石斧の未製品として扱った大型の石器である。基部及び刃部と胴部側縁の一部に剥離を施しているため、敲石等とは区別した。27は円形の刃部をもち、頭部が欠損する。28も、21と同様に今回の資料中では小型であり、頭部及び胴部背面に自然面を有する。29は、砂岩製の

打製石斧で、残存部位は胴部のみである。形態的には胴部中央から刃部に向かって開くと推測でき、最大幅・最大厚がともに26に類似する。

(5) 敲石・凹石・磨石 (30~38)

礫を素材として、敲打・研磨の痕跡が認められる石器を抽出した。北村遺跡の報告書を参考に、3類5細分の分類基準を設定した。

第7表 敲石・凹石・磨石の分類

大別	細別
A類 円形	1種A類 礫をそのまま使用し、扁平・球状のもの
	2種A類 素材縁辺に加工し、車輪形を呈するもの
B類 楕円形	1種B類 礫をそのまま使用し、扁平・球状のもの
	2種B類 素材縁辺に加工し、石鈿形のもの
C類 長楕円・長方形	長楕円あるいは長方形を基本とするもの

敲石・凹石・磨石は9点を資料化した。30・31・38は、素材礫をそのまま使用し円形を呈する。30・31は球状で、30は部分的に敲打痕を有する。31には敲打痕はなく、表裏面ともに平滑面を確認した。38は扁平で、側縁の一部を連続して剥離している。表裏面共に平滑面を確認できた。32・33・35・36は、素材礫をそのまま使用し、楕円形を呈する。32・35・36には、一部敲打痕を確認できる。33は、表裏面及び持ち手を有する側面に平滑面を確認できた。また36は、表面に濃い赤色箇所があり、顔料を加工した石器の可能性が有する。34・37は、長楕円形を呈する。いずれも中央で欠損しており、全形は不明である。34は、表裏面共に平滑面をもつ。37は、部分的に敲打痕跡を有する。

(6) 砥石 (39)

研磨作業の痕跡が確認できる資料を抽出した。

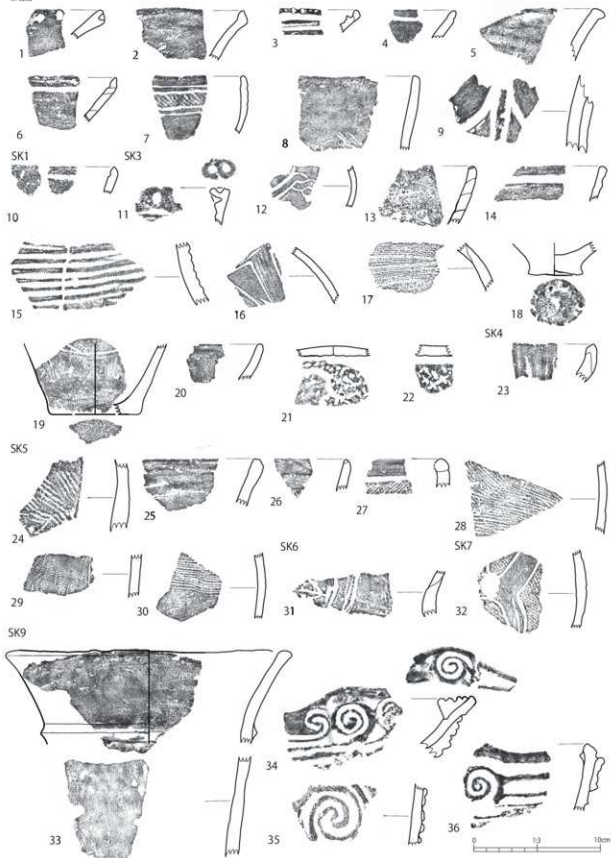
39は、素材となる礫を成形せずに直接使用した砥石と判断した。素材礫の形態は、長方形を呈していたと考えられるが、表裏面に断面V字状の溝が刻まれており、この溝に沿って部分的に素材礫が欠損している。なお、使用面は表裏面及びこの欠損によって生じた側面の3面である。

(7) 石皿 (40)

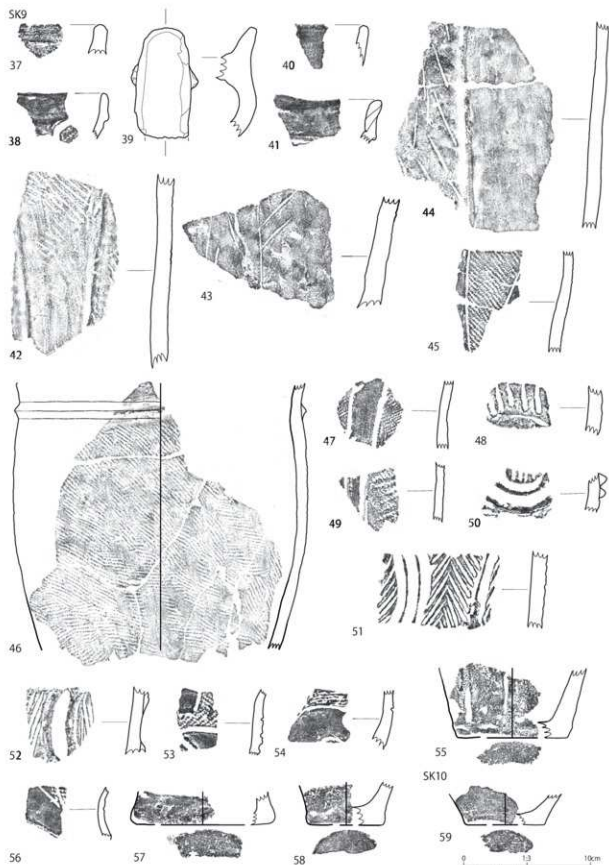
礫を素材として、楕円形または長方形に近い形態で中央に浅い凹部を有し、平坦面に設置して使用できる裏面を形成している石器を抽出した。北村遺跡の報告書では、台石・石皿を8類型に分類している。

40は、安山岩の礫を素材として加工を施し、裏面に方形の低い脚部を有する。欠損部が大きいのが、全体は長方形を呈すると考えられる。凹部は広く平坦で、断面台形の縁部を作り出している。使用面は凹部の全面に及ぶ。このような特徴は、北村遺跡報告書分類の第2種F類に該当する。なお、この資料は試掘出土資料と、第5次調査でのSK1出土資料が接合したものである。

試圖

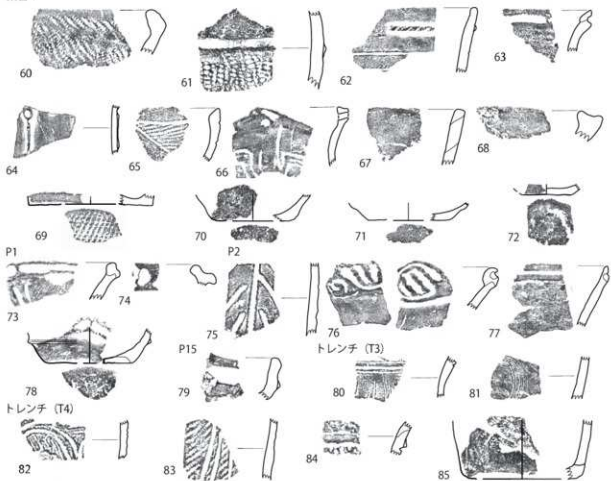


第15圖 出土土器 1

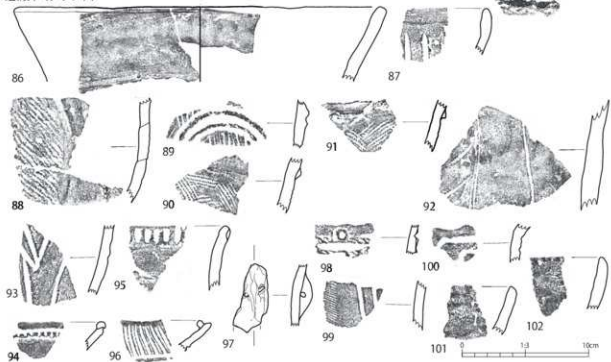


第16図 出土土器 2

集石 1

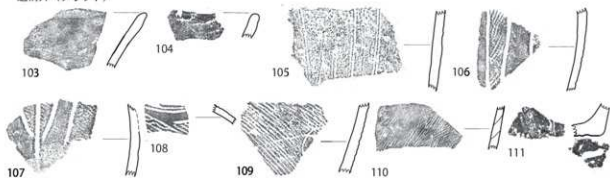


遺構外 (グリッド)

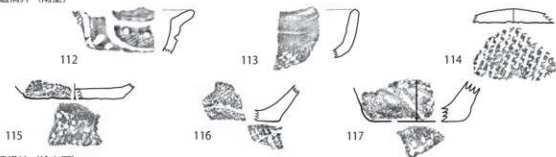


第17図 出土土器 3

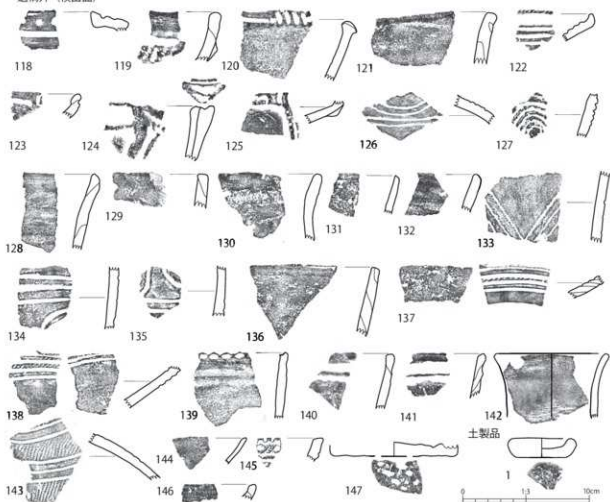
遺構外 (グリッド)



遺構外 (兩壁)



遺構外 (検出面)

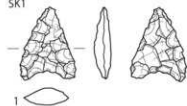


土製品
1 1/3 10cm

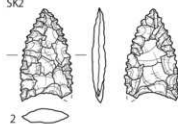
第18図 出土土器4・土製品

石器

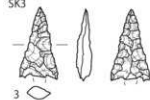
SK1



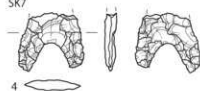
SK2



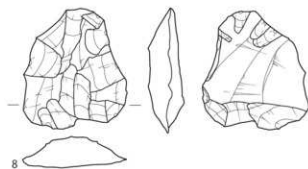
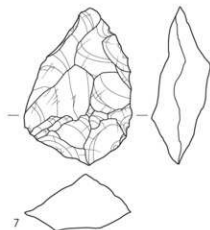
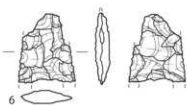
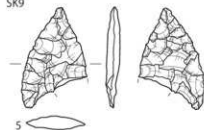
SK3



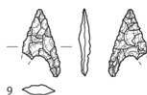
SK7



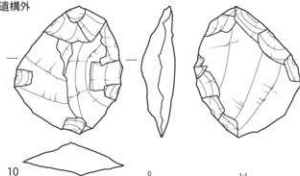
SK9



集石 1

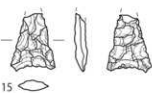
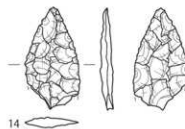
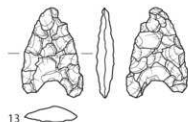
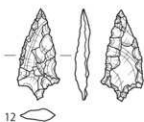
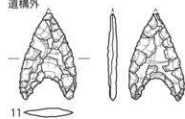


遺構外

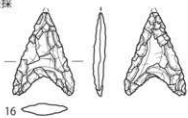


第19図 出土石器 1

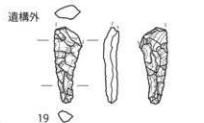
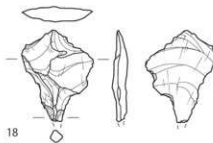
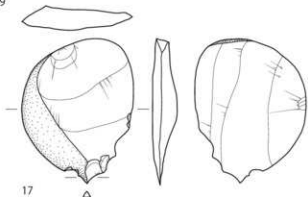
遺横外



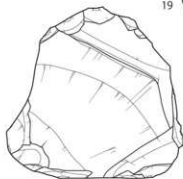
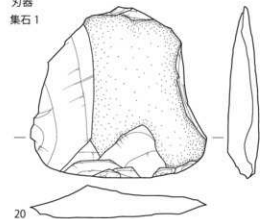
表探



石錐
SK9

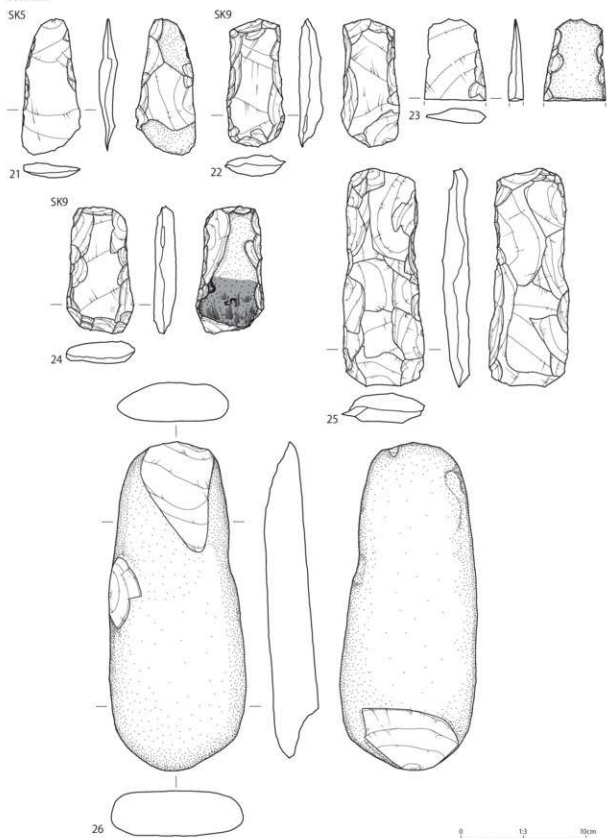


刃器
集石 1



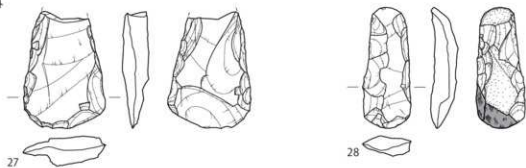
第20図 出土石器 2

打製石斧

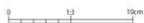
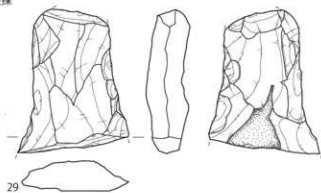


第21圖 出土石器 3

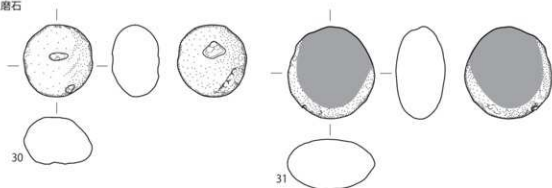
遺構外



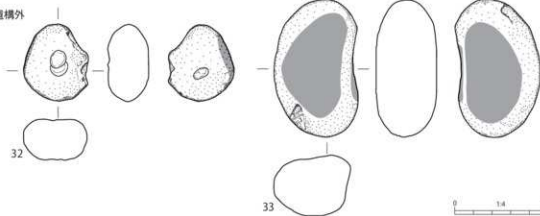
表採



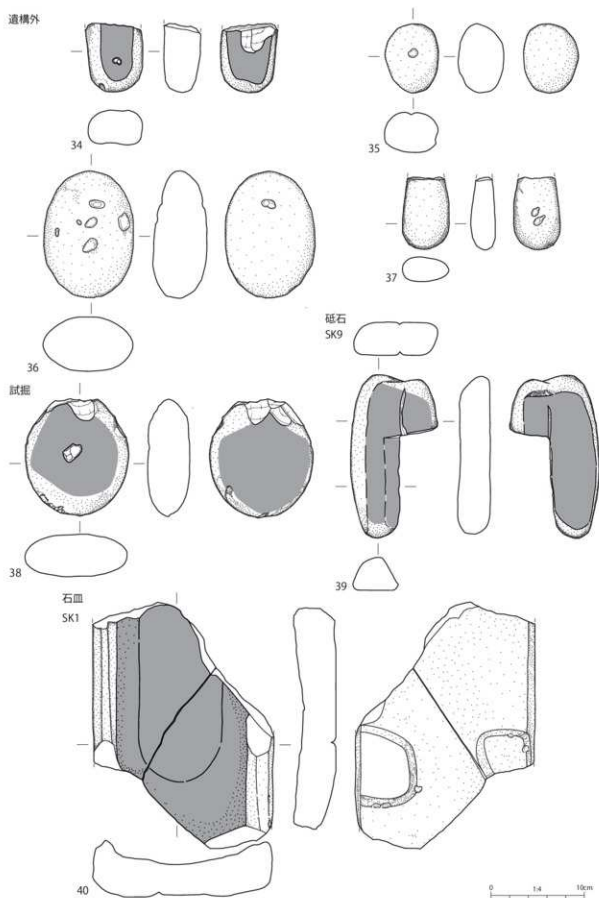
凹・敲・磨石
SK9



遺構外



遺構外



第23図 出土石器 5

第8表 土器観察表

No.	出土位置	時期	器種	文様	口徑 (cm)	底徑 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
1	試掘区	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
2	試掘	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
3	試掘	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	沈線+口縁キザミ	不明	口縁部
4	試掘	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
5	試掘	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
6	試掘	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	沈線+口縁キザミ	不明	口縁部 - 体部上半
7	試掘	縄文後期前半	深鉢	磨滑縄文	不明	不明	不明	RL縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
8	試掘	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
9	試掘	縄文後期前半	深鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
10	SK 1	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	沈線+ナデ	不明	口縁部
11	SK 3	縄文後期前半	鉢	刺突	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
12	SK 3	縄文後期前半	注口土器	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ミガキ	ナデ	不明	体部上半
13	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	口縁押圧+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
14	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
15	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	壺	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
16	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	壺	沈線文	不明	不明	不明	条痕+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
17	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	壺	条痕	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明	体部上半
18	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	壺	0	不明	4.6	(2.6)	ナデ	ナデ	不明	体部下半 - 底部
19	SK 3	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	不明	沈線文	不明	6.8	(5.6)	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部下半 - 底部
20	SK 3	不明	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
21	SK 3	不明	不明	不明	不明	5.8	不明	不明	ナデ	新代	底部
22	SK 3	不明	不明	不明	不明	不明	(0.8)	不明	ナデ	新代	底部
23	SK 4	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
24	SK 5	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	L縄文	ナデ	不明	体部
25	SK 5	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
26	SK 5	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
27	SK 5	縄文後期中葉	深鉢	縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
28	SK 5	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	条痕	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明	体部
29	SK 5	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	RL縄文	ナデ	不明	体部
30	SK 5	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	壺	磨滑文	不明	不明	不明	ナデ+磨滑文	ナデ	不明	体部上半
31	SK 6	縄文後期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
32	SK 7	縄文後期前半	鉢	磨滑縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ミガキ	ナデ	不明	体部下半
33	SK 9	縄文中期後半	深鉢	0	23.0	不明	(7.4)	隆線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
34	SK 9	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
35	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
36	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半

No.	出土位置	時期	器種	文様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
37	SK 9	縄文中期後半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
38	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
39	SK 9	縄文中期後半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
40	SK 9	縄文中期後半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
41	SK 9	縄文中期後半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
42	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
43	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
44	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
45	SK 9	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	(21.0)	隆線+LR縄文	ナデ	不明	体部
46	SK 9	縄文中期後半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
47	SK 9	縄文中期後半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
48	SK 9	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
49	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	RL縄文+隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
50	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
51	SK 9	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
52	SK 9	縄文中期後半	深鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
53	SK 9	縄文中期後半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
54	SK 9	縄文中期後半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	L縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
55	SK 9	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	8.8	(5.4)	沈線+ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
56	SK 9	縄文後期前半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	縄文(原体不明)+沈 線+ナデ	ナデ	不明	体部
57	SK 9	不明	不明	0	不明	10.6	(2.6)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
58	SK 9	不明	不明	0	不明	5.8	(3.4)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
59	SK10	不明	不明	0	不明	6.2	(2.4)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
60	集石1	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	RL縄文	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
61	集石1	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	LR縄文+隆線+ナデ	ナデ	不明	体部
62	集石1	縄文後期前半	鉢	隆沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
63	集石1	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	隆沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
64	集石1	縄文後期前半	鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
65	集石1	縄文後期前半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
66	集石1	縄文後期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
67	集石1	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
68	集石1	不明	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
69	集石1	不明	不明	不明	不明	9.8	(0.7)	不明	ナデ	網代	底部
70	集石1	不明	不明	0	不明	6.4	(2.1)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
71	集石1	不明	不明	0	不明	6.4	(1.4)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
72	集石1	不明	不明	0	不明	3.8	(1.3)	ナデ	ナデ	0	体部下半 - 底部
73	P1	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半

第6章 遺物

No.	出土位置	時期	器種	文様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
74	P1	縄文後期前半	鉢	刺突	不明	不明	不明	刺突+ナデ	ナデ	不明	口縁部
75	P2	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
76	P2	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
77	P2	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
78	P2	縄文後期前半	深鉢	隆線文	不明	7.0	(2.8)	隆線+ナデ	オサエ	網代	体部下 - 底部
79	P15	縄文中期後半	深鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
80	T3	縄文前期後葉	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
81	T3	縄文後期前半	深鉢	条線文	不明	不明	不明	条線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
82	T4	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
83	T4	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線	ナデ	不明	体部上半
84	T4	縄文中期後半	深鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+沈線+刺突	ナデ	不明	体部上半
85	T4	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	9.4	(4.6)	縄文(原体不明)	ナデ	不明	体部下 - 底部
86	B2b	縄文中期後半	深鉢	0	29.2	不明	(5.9)	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
87	B2b	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
88	A1x	縄文中期後半	深鉢	隆線文	不明	不明	不明	L縄文+隆線	ナデ	不明	体部
89	A2o	縄文中期後半	深鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
90	B2b	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	縄文+隆線	ナデ	不明	体部上半
91	B2b	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	縄文+隆線	ナデ	不明	体部上半
92	B2b	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
93	B2p	縄文中期後半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
94	A2t3層	縄文後期前半	鉢	隆線文	不明	不明	(2.5)	隆線+キザミ+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
95	B1v	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
96	B2b	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	隆線+ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
97	A1y	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	突起+ナデ	ナデ	不明	体部上半
98	A1w	縄文後期前半	鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+突起+ナデ	ナデ	不明	体部上半
99	B1v	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
100	B1v	縄文後期前半	鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	縄文(原体不明)+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
101	A2t3層	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
102	B1u	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
103	B1v	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
104	B1v	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
105	B1v	縄文後期前半	深鉢	条痕	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明	体部
106	A1s	縄文後期前半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
107	B1v	縄文後期前半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部
108	B1u	縄文後期中葉	注口土器	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ミガキ	ミガキ	不明	体部上半
109	B1u	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	条痕+沈線	ナデ	不明	体部上半
110	B1v	縄文晩期後葉 - 弥生中期前半	深鉢	条痕	不明	不明	不明	条痕	ナデ	不明	体部

No.	出土位置	時期	器種	文様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	技法の特徴			残存部
								外面調整	内面調整	底部	
111	A 213層	不明	不明	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	底部
112	南壁清掃	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+刺突	ナデ	不明	口縁部
113	南壁清掃	縄文後期前半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	LR縄文+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
114	南壁清掃	不明	不明	不明	不明	6.5	(1.1)	不明	ナデ	網代	底部
115	南壁清掃	不明	不明	不明	不明	7.5	(1.2)	不明	ナデ	網代	底部
116	南壁清掃	不明	不明	0	不明	不明	(2.9)	ナデ	ナデ	網代	体部下半 - 底部
117	南壁清掃	不明	不明	不明	不明	7.0	(3.2)	ナデ	ナデ	網代	体部下半 - 底部
118	検出面	縄文前期後葉	浅鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+刺突+ナデ	ナデ	不明	口縁部
119	検出面	縄文中期後半	深鉢	縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
120	検出面	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
121	検出面	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
122	検出面	縄文後期前半	鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	沈線+口縁キザミ	不明	口縁部
123	検出面	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部
124	検出面	縄文後期前半	鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
125	検出面	縄文後期前半	鉢	隆線文	不明	不明	不明	隆線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
126	検出面	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
127	検出面	縄文後期前半	鉢	沈線文	不明	不明	不明	同心円文	ナデ	不明	体部上半
128	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
129	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
130	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
131	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
132	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
133	検出面	縄文後期前半	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
134	検出面	縄文後期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
135	検出面	縄文後期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
136	検出面	縄文後期前半	深鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	体部上半
137	検出面	縄文後期中葉	浅鉢	0	不明	不明	不明	ナデ	沈線+キザミ+ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
138	検出面	縄文後期中葉	深鉢	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
139	検出面	縄文晩期後葉 - 発生中期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
140	検出面	縄文晩期後葉 - 発生中期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
141	検出面	縄文晩期後葉 - 発生中期前半	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
142	検出面	縄文晩期後葉 - 発生中期前半	遊	0	(R2)	不明	(5.1)	ナデ	ナデ	不明	口縁部 - 底部
143	検出面	縄文晩期後葉 - 発生中期前半	遊	磨消縄文	不明	不明	不明	LR縄文+沈線+ナデ	ナデ	不明	体部上半
144	検出面	平安	土師器杯	0	不明	不明	不明	ロクロ	ナデ	不明	口縁部 - 体部上半
145	検出面	不明	深鉢	沈線文	不明	不明	不明	沈線+口縁キザミ+ナデ	ナデ	不明	口縁部
146	検出面	不明	不明	0	不明	不明	不明	ナデ	ナデ	不明	口縁部
147	検出面	不明	不明	不明	不明	9.6	(1.1)	不明	オサエ	網代	底部

() は残存している部分の流量。

第6章 遺物

第9表 石鏃観察表

No.	出土位置	種別	分類	北村分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	先端角	側角	備考
1	SK 1	石鏃	凹基無茎	I B 1	チャート	1.9	1.5	0.4	1.0	50	130	
2	SK 2	石鏃	凹基無茎	I B 1	チャート	(2.4)	(1.4)	(0.4)	(1.1)	70	140	基部の先端欠損
3	SK 3	石鏃	凹基有茎 II		黒曜石	(1.9)	(1.0)	(0.4)	(0.5)	30	-	茎部欠損
4	SK 7	石鏃	凹基無茎	I B 2	黒曜石	(1.5)	(1.7)	(0.3)	(0.6)	不明	55	先端欠損
5	SK 9	石鏃	凹基無茎	I B 2	チャート	(2.7)	(1.7)	(0.4)	(1.4)	60	(105)	基部の先端欠損
6	SK 9	石鏃	不明	不明	黒曜石	1.8	1.5	0.4	0.9	不明	不明	未製品または失敗作
7	SK 9	石鏃(未製品)	不明	不明	チャート	4.1	2.8	1.4	13.8	75	-	
8	SK 9	石鏃(未製品)	不明	不明	チャート	3.2	2.7	0.8	7.8	不明	-	
9	集石 1	石鏃	凹基無茎	I B 2	チャート	(1.8)	(0.9)	(0.3)	(0.1)	40	(65)	基部の先端欠損
10	A 1 t	石鏃(未製品)	不明	不明	珪質泥岩	4.5	2.9	0.8	6.2	不明	-	
11	A 2 o	石鏃	凹基無茎	I B 2	チャート	(2.3)	1.5	0.2	0.8	55	80	先端欠損
12	A 2 o	石鏃	凸基有茎 II D 1		黒曜石	2.4	1.1	0.4	0.6	45	-	
13	A 2 t	石鏃	凹基無茎	I B 2	チャート	2.4	1.6	0.4	1.4	55	100	
14	B 1 p	石鏃	不明	不明	チャート	(2.7)	(1.4)	(0.3)	(1.2)	45	不明	基部欠損
15	B 1 v	石鏃	不明	I B 1	チャート	(1.5)	(1.2)	(0.3)	(0.5)	(30)	150	先端欠損
16	表採	石鏃	凹基無茎	I B 2	チャート	2.2	1.6	0.3	0.8	45	100	

() は残存している部分の法量。

第10表 石錐・刃器観察表

No.	出土位置	種別	北村分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	機能部断面形	備考
17	SK 9	石錐	I A	泥岩	5.7	4.4	0.9	21.6	三角形	機能部のみ加工
18	SK 9	石錐	I B 2	チャート	(3.5)	2.8	0.5	(3.9)	菱形	機能部先端欠損
19	A 2 o	石錐	II D	黒曜石	3.0	1.1	0.6	1.5	菱形	機能部は一端のみに作目
20	集石 1	刃器	大型 A 2 b	珪質泥岩	6.8	7.0	1.3	63.3	-	3 縁辺を加工する、刃部細線摩耗

() は残存している部分の法量。

第11表 打製石斧観察表

No.	出土位置	種別	分類	北村分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	頭部	刃部	備考
21	SK 5	打製石斧	楕円形	B 1	砂岩	10.5	4.6	1.3	62.1	円	円	背面の頭・刃部に自然面
22	SK 9	打製石斧	長方形	A	泥岩	10.2	4.5	1.8	108.0	尖	円	刃部 1/4 程度摩耗
23	SK 9	打製石斧	台形	E 1	砂岩	(7.5)	(4.9)	(1.2)	(41.9)	円	不明	刃部欠損、背面ほとんど自然面
24	SK 9	打製石斧	台形	E 1	頁岩	9.9	5.8	1.7	122.4	円	斜	刃部 1/4 程度使用痕あり
25	SK 9	打製石斧	長方形	A	砂岩	17.4	6.4	2.0	270.4	斜	直	2 点接合
26	SK 9	打製石斧 (未製品)	不明	不明	砂岩	26.3	10.9	3.1	1572.0	円	円	素材確に数回の打撃のみ
27	B 1 u	打製石斧	台形	E 1	砂岩	(9.3)	(6.6)	(2.0)	(118.9)	不明	円	頭部欠損
28	B 1 u	打製石斧	台形	E 1	ホルン フェルス	9.7	3.9	1.9	84.1	円	円	頭・胴部に自然面
29	表採	打製石斧	台形	E 1	砂岩	(11.3)	(8.5)	(3.1)	(399.4)	不明	不明	頭・刃部欠損(胴部のみ)

() は残存している部分の法量。

第12表 敲石・凹石・磨石等観察表

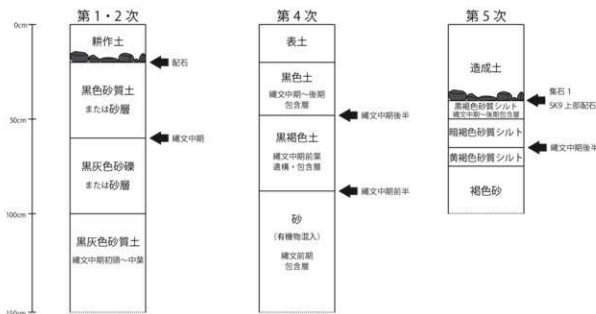
No.	出土位置	種別	北村分類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	摩擦面 紙面	備考
30	SK 9	凹石・敲石・磨石	磨石等 1A	花崗斑岩	7.7	7.5	5.0	422.5	0	
31	SK 9	凹石・敲石・磨石	磨石等 1A	花崗岩	9.8	9.3	5.3	672.5	2	
32	A 2+	凹石・敲石・磨石	磨石等 1B	花崗岩	8.3	6.7	4.4	376.7	1	
33	A 2+	凹石・敲石・磨石	磨石等 1B	輝岩	14.8	8.7	6.5	1232.5	3	
34	検出	凹石・敲石・磨石	磨石等 1C	花崗閃緑岩	(7.3)	(6.0)	(3.7)	(290.0)	2	中央付近で折損
35	検出	凹石・敲石・磨石	磨石等 1B	花崗岩	7.4	5.7	4.3	274.1	0	
36	検出	凹石・敲石・磨石	磨石等 1B	閃緑岩	13.6	9.2	5.7	1065.0	0	赤色顔料付着あり
37	南壁遺構	凹石・敲石・磨石	磨石等 1C	砂岩	(8.0)	5.0	2.6	(142.8)	0	中央付近で折損
38	試掘	凹石・敲石・磨石	磨石等 1A	輝石安山岩	12.5	11.1	4.5	878.0	2	
39	SK 9	砥石	砥石 1 A 2	砂岩	17.5	9.2	3.5	757.4	3	表裏ともに溝あり
40	SK 1	石皿	台石・石皿 2F	安山岩	(22.2)	(19.5)	(6.1)	2250.0	1	裏面に脚部、広く平坦な凹部

() は残存している部分の法量。

第7章 調査の総括

今回の調査では個人住宅建設に際し、調査面積100㎡の発掘を実施した。調査の結果、縄文・弥生時代の土坑10基及び集石等を確認し、ほうろく屋敷遺跡における遺構分布及び遺跡継続時期について新たな所見を得た。

1 堆積状況と遺構の関係

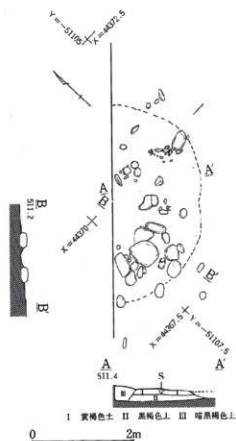


第24図 層位対照図

ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査における層序と検出遺構の関係は、第4・5章のとおりである。着目するのはSK9で、今回の調査で唯一上部に配石を持つ掘り込みであった。また、下部の掘り込みは確認できなかったが、集石1も同様に配石状に礫が散布していた。これらSK9上部配石及び集石1の検出層位は、基本土層2層上面で、現代の造成土直下である。

なお、SK9の平面位置を検討すると、第2次調査で確認した敷石10号住に近い(第25図)。敷石10号住は、第2次調査において一部分のみ調査され、未調査部分は調査区外となっている。平面形は不明で、遺構を旧耕作土直下で検出した点がSK9と共通する。直径4m程度の円形の範囲のところどころに平石の敷石と床面が残存していた。第2次調査では炉と柱穴は確認していない。埋堦として無文の深鉢が出土しており、縄文時代後期前半と推定された。

過去の調査事例では、第1・2次調査で耕作土直下から配石を検出している。配石自体の年代は、出土土器から、SK9及び集石1ともに縄文時代中期後半に比定でき、第1・2次調査での出土状況と整合的である。また、第5次調査の調査区は第1・2次調査の調査区と隣接しているため、第5次調査で



第25図 敷石10号住 (明科町教委1991)

精査したSK9及び集石1は、第1・2次調査で確認した配石の一部である可能性が極めて高い。

SK9上部配石及び集石1の下層は、黒褐色砂質シルトでSK9が掘り込まれるほか、縄文時代中期～後期の遺物包含層となっている。第4次調査では、表土直下に黒色土の堆積が見られ、縄文時代中期～後期の包含層となっていることから、第5次調査の基本土層2・3層と同一層である可能性が高い。

縄文時代中期前半の遺構・遺物に着目すると、第1・2次調査の黒灰色砂質土、第4次調査の黒褐色土がいずれも当該期の堆積である。第5次調査では、縄文時代中期前半の遺構面は確認できなかったが、層序の前後関係から基本土層4層が当該期の堆積層に該当すると考えられる。

また、第4次調査において最下層で確認した砂層は、第5次調査における基本土層5層に対比できる。

2 今回確認した遺構と集落との関係

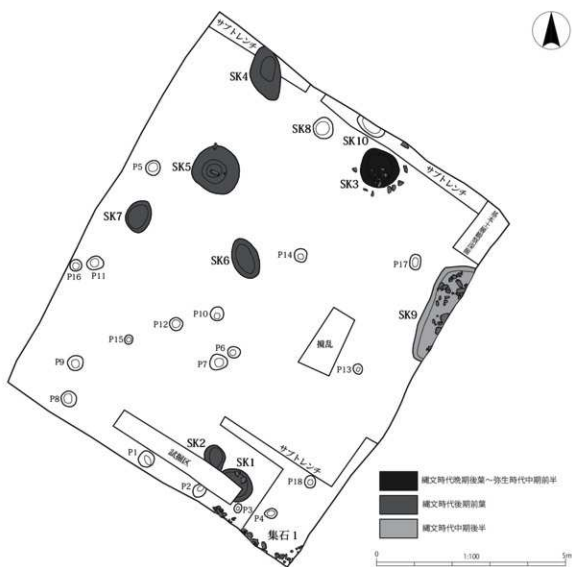
ほうろく屋敷遺跡第5次発掘調査で確認した遺構のうち、出土物から埋没年代を特定できた例は第26図のとおりである。時期別にみると、縄文時代中期後半がSK9及び集石1、縄文時代後期前葉がSK1・2・4・5・6・7、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半がSK3となっている。

このうちSK9は、調査区外まで範囲が広がるため全形を確認していない。このため、土坑以外の遺構である可能性も残されている。なお、SK9からは比較的大きな土器片のほか、石器として石鎌、石錐、打製石斧、凹石・敲石・磨石、砥石といった多様な器種(口絵2)が出土している点も特徴的である。

今回確認した遺構では、縄文時代後期前葉の土坑が最多であった。遺構と出土物の特徴としては、円形または楕円形の平面形をもち、土器は小破片が多いことが挙げられる。出土状況としては、覆土中に散漫に含まれており、底部などからまとまって出土した状況とはいえない。このため、土坑の性格の決定には至らなかった。

SK3からは、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半の遺物が主体的に出土した。縄文時代晩期後葉に特徴的な、口縁部付近に浅く広い沈線をもつ深鉢(13・14)、細密条痕を有する壺(16・17)、多条の横走沈線を有する壺(15)が共存しており、埋没年代は弥生時代を下る可能性が高い。出土状況としては、検出面から覆土上層で多くの土器片が出土しており、遺構底面付近からの出土は少量であった。

上記の様相から、今回の調査区が通時的に積極的に居住域として使用されたとは判断しにくい。隣接する第1・2次調査の調査区に多数の竪穴建物跡が存在していることから、第5次調査区では縄文時代中期後半～後期前葉に居住域の縁辺で土坑群を形成し、縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半においては、再葬墓の造営された時期に土坑を構築していることがわかる。第5次調査区は、地形的に小段丘の段丘崖に近いため、遺跡内での遺構分布としては最外縁部であると理解できる。このことから、縄文時代中期後半～後期前葉の集落域と土坑群が分離して形成されることが明らかとなった。これに対し、これまでの調査で確認されていない再葬墓を営んだと考えられる縄文時代晩期後葉～弥生時代中期前半の人々の居住域の所在は、未確認のままである。



第26図 時期別遺構図



1 調査地遠景（北から）



2 完掘状況（南から）



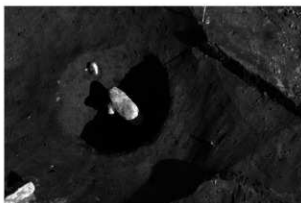
3 調査前 (南西から)



4 SK 1・2完掘 (北から)



5 SK 3調査状況 (北から)



6 SK 5完掘 (南から)



7 SK 9調査状況 (東から)



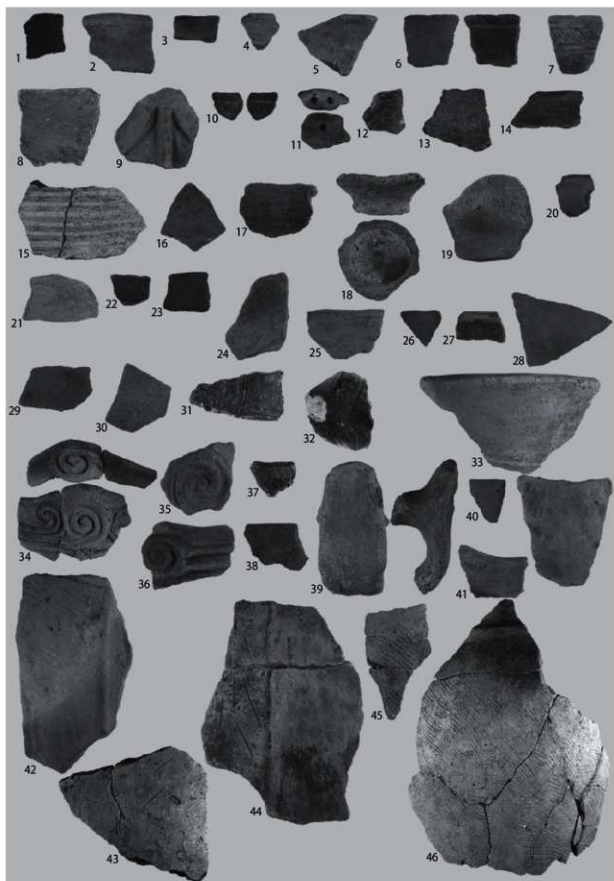
8 SK 9セクション (西から)



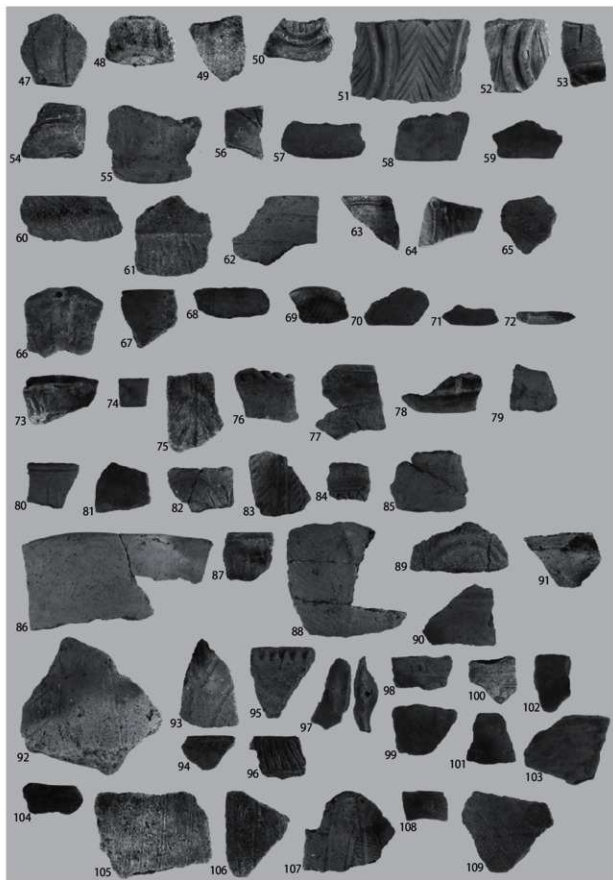
9 集石 1 (北から)



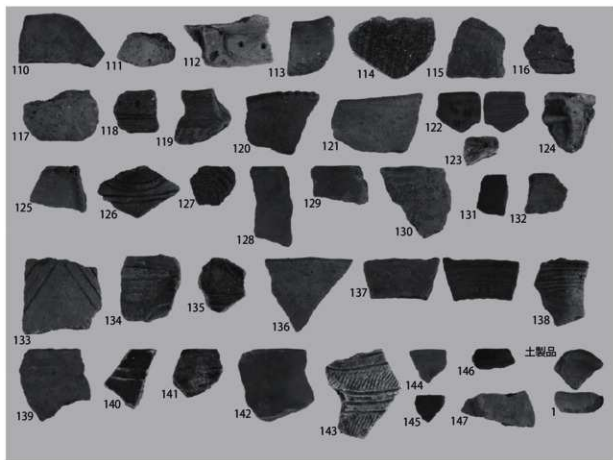
10 調査終了状況 (南から)



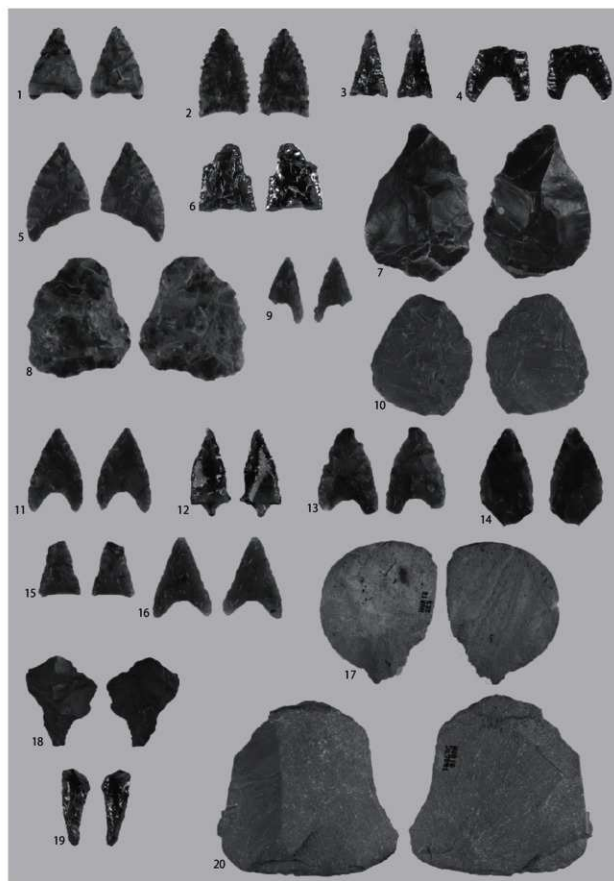
11 出土土器 1 (S=1/3)



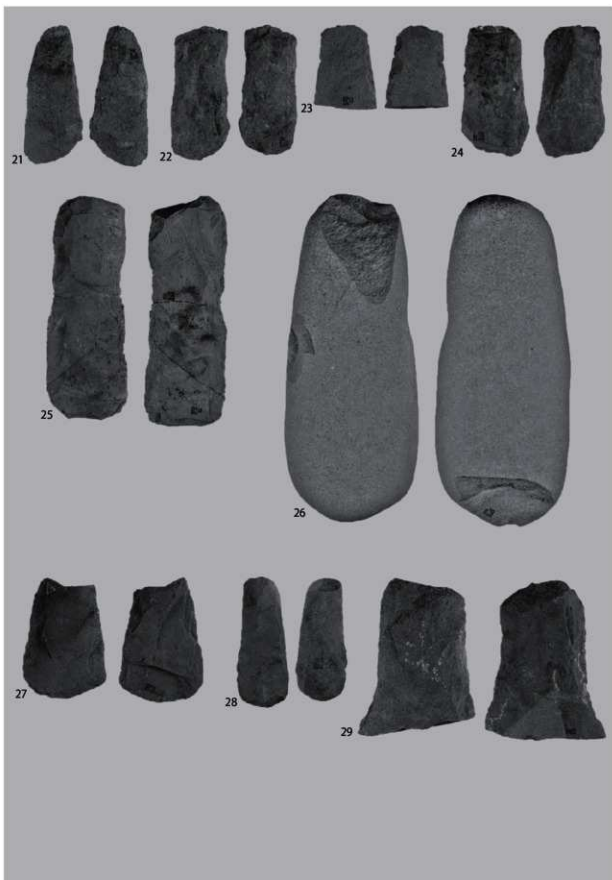
12 出土土器 2 (S = 1/3)



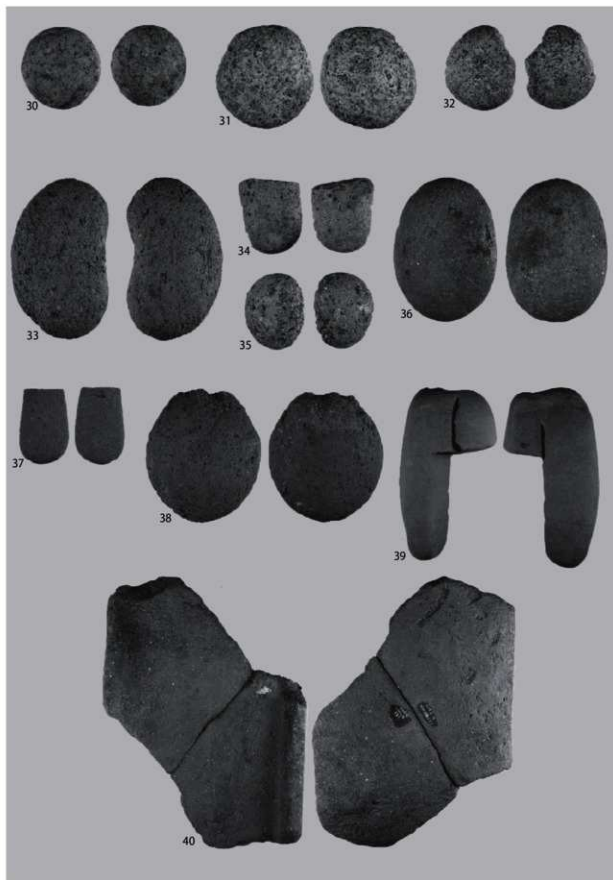
13 出土土器 3・土製品 (S=1/3)



14 出土石器 1 (1~16 : S = 1/1 17~20 : S = 2/3)



15 出土石器 2 (S = 1/3)



16 出土石器 3 (S = 1/4)

引用・参考文献（五十音順）

- 明科町史編纂会編 1984 『明科町史』上巻 明科町史刊行会
- 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡—川西地区県は場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第3集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2000 『明科庵寺址—個人住宅建替えに伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第7集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第11集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2004 『上手屋敷遺跡第2次調査—町営住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第12集 明科町教育委員会
- 明科町教育委員会 2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第13集 明科町教育委員会
- 安曇野市教育委員会 2017 『平成27年度安曇野市埋蔵文化財調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第11集 安曇野市教育委員会
- 上峯篤史 2018 『縄文石器—その視角と方法』京都大学学術出版会
- 太田幸幸、河西清光 1966 「長野県東筑摩郡明科町七貴緑ヶ丘遺跡調査」『松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』長野県考古学会 pp.139-156
- 長野県編 1988 『長野県史 考古資料編』全1巻（4）遺構・遺物 長野県史刊行会
- 長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14 長野県埋蔵文化財センター
- 松本市教育委員会 1998 『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ—緊急発掘調査報告書—』松本市文化財調査報告 No.130 松本市教育委員会

調査報告書抄録

ふりがな	ほうろくやしきいせき5							
書名	ほうろく屋敷遺跡5							
副書名	個人住宅建設に伴う第5次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	安曇野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	土屋和章、横山幸子、山下泰永							
編集機関	安曇野市教育委員会							
所在地	〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地 TEL 0263-71-2000							
発行年月日	西暦2019年3月29日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ほうろく 屋敷遺跡 (第5次)	長野県安曇野市 明科南陸郷3192番	20220	5-101	36° 24′ 06″	137° 55′ 37″	20160322 ～ 20160418	100㎡	個人住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ほうろく 屋敷遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	土坑10 集石1 ピット	縄文土器、弥生土器、 土製品、石器		第5次発掘調査地は、 集落跡の北側最外縁部 と考えられる。		
要約	ほうろく屋敷遺跡は、犀川が大きく蛇行した地点の左岸段丘上に展開する縄文時代から中近世にかけての集落跡である。この遺跡では、これまでに4次にわたる発掘調査が実施され、縄文時代中～後期及び平安時代の集落跡、弥生時代中期初頭の壺棺再葬墓が確認されていた。本書掲載の第5次調査は、縄文時代の集落跡の北辺で実施した。この結果、縄文時代中期から弥生時代中期前半の土坑10基のほか、第2次調査で確認した縄文時代中期後半の配石の延長部分を確認した。さらに、この地点には竪穴建物跡が存在しないことも明らかとなった。こうした遺構分布状況に併せて、第5次調査区が地形的に小段丘の段丘崖に接しているため、今回の調査地点は、ほうろく屋敷遺跡における集落域の北側最外縁部であるといえる。							

安曇野市の埋蔵文化財第16集

ほうろく屋敷遺跡5

個人住宅建設に伴う第5次発掘調査報告書

発行 平成31年(2019)3月29日
安曇野市教育委員会
〒399-8281 長野県安曇野市豊科6000番地
電話0263-71-2000

編集 安曇野市教育委員会
印刷 電算印刷株式会社

